

特 100

966

新著文庫
青島
攻撃
鬼
佐
久
間



始

持100

966



青島
肉彈戰

鬼

佐

久

間



大正

3. 12. 10

内交





THE UNIVERSITY OF CHINA PRESS

中國大學出版社



少佐の畧歴

水戸市大字下市仲之町十一番地
士族貞男弟

騎兵少佐從六位
勳五等功五級 佐久間善次

明治三十二年十二月一日士官候補生として騎兵第一聯隊入隊
△三十三年十二月一日士官學校入學△三十四年十一月卒業見
習士官△三十五年六月騎兵少尉に任ぜられ同日騎兵第十六聯
隊附に補せらる△全年十一月正八位に叙せらる△三十七年五
月より三十八年十月まで日露戦役に從軍中沙河黒溝臺奉天の

目次

▼第一 彈	(日 獨 國 交 の 斷 絶)……………	一
▼第二 彈	(恨みは茲に二十年)……………	七
▼第三 彈	(青島籠城に汲々たり)……………	一三
▼第四 彈	(膠州灣全沿岸の封鎖)……………	一九
▼第五 彈	(鬼佐久間騎兵大尉)……………	二五
▼第六 彈	(山東の一角に旭の旗)……………	三〇
▼第七 彈	(一撃の下に粉碎せん)……………	三三
▼第八 彈	(馬蹄に蒐て蹂躙せよ)……………	四三
▼第九 彈	(天晴れなる敵前上陸)……………	四九

各會戰に参加して殊勳あり△三十七年十一月從軍中々尉に任
 ぜらる△三十八年十一月從七位に叙せらる△四十年六月騎兵
 第十五聯隊附に補せらる△四十三年十二月正七位に叙せらる
 △四十五年一月某中隊長に補せらる△三十七八年戰役の功に
 依り功五級金鵄勳章並に勳六等に叙し旭日章を賜はる△大正
 二年五月勳五等瑞寶章を賜はる△大正三年九月騎兵少佐に任
 ぜらる△大正三年日獨戰役に参加し中華民國山東省流亭に戰
 死す△大正三年九月十八日大正三年戰役の功に依り功四級金
 鵄勳章並に勳四等旭日小授章を賜はる。

▼第十彈 だいでん (我陸軍の鬼長官)……………五三

▼第十一彈 (上陸部隊の一と働き)……………五八

▼第十二彈 (鬼大尉流亭に戦ふ)……………六五

▼第十三彈 (寒中の水泳と行水)……………七〇

▼第十四彈 (こん畜生怪からん)……………七六

▼第十五彈 (天晴れ見上げた居候)……………八一

▼第十六彈 (相變らずの勉強か)……………八六

▼第十七彈 (向島の花見の惨事)……………九二

▼第十八彈 (身を殺して仁を爲す)……………九七

▼第十九彈 (確に甘黨の旗頭)……………一〇二

▼第二十彈 (意外なり博徒の襲撃)……………一〇八

▼第廿一彈 だいでん (所屬聯隊の誇である)……………一一三

▼第廿二彈 (勇と猛との大衝突)……………一二〇

▼第廿三彈 (日本刀の斬れ味は)……………一二九

▼第廿四彈 (凱旋土産軍國の花)……………一三四

▼第廿五彈 (日本武士の好典型)……………一四一

▼第廿六彈 (出征に臨んで遺訓す)……………一四八

▼第廿七彈 (夢も結ばぬ此の露營)……………一五六

▼第廿八彈 (軍司令部の前進)……………一六一

▼第廿九彈 (青島防備の偵察)……………一六八

▼第三十彈 (攻撃軍の戦畧奈何)……………一七三

▼第卅一彈 (飛行機來る噫愉快)……………一八〇

- ▼ 第卅二彈 だいに 鬼大尉最後の訓示…………… 一八九
- ▼ 第卅三彈 だいに 大膽不敵の鬼佐久間…………… 一九二
- ▼ 第卅四彈 だいに 小賢しい敵の振舞…………… 一九八
- ▼ 第卅五彈 だいに 名譽の戦死鬼少佐…………… 二〇三
- ▼ 第卅六彈 だいに 白砂河戦の價値…………… 二一三
- ▼ 第卅七彈 だいに 少佐死して餘榮あり…………… 二一四
- ▼ 第卅八彈 だいに 少佐最後の手紙…………… 二一五
- ▼ 第卅九彈 だいに 少佐の遺書と其内容…………… 二二一
- ▼ 第四十彈 だいに 遺骨となつて凱旋…………… 二二三
- ▼ 第四十一彈 だいに 叙勳行賞の御沙汰…………… 二二四
- ▼ 第四十二彈 だいに 戦史上の第一記録…………… 二二五

目次 (完)

- ▼ 第四十三彈 だいに 女姑山砲臺の同士撃…………… 二三一
- ▼ 第四十四彈 だいに 眞に此特進士官…………… 二三九
- ▼ 第四十五彈 だいに 論功行賞の御沙汰…………… 二四四

青島 肉彈戰 鬼 佐 久 間

三 木 都 山

第一 彈

(日獨國交の斷絶)

日獨戦争最初の犠牲者、肉弾をもつて敵軍二百を馬蹄に懸けつゝ、鬼神の如く猛進し、一時間餘に互る攻圍軍第一戦に於いて壯烈悲壯の戦死を遂げたる我が陸軍騎兵少佐佐久間善次氏の経歴談を語らふ。

話しの順序として先づ我が日本帝國が世界の強國獨逸帝國と戦ふの餘儀なくせられた其の顛末を語らねばならぬ、抑々今回全歐大動亂に際しては

各國から注目されたのが我日本帝國の態度であつた。然るに我日本帝國の採る可き方針は例へ同盟國たる英國が騒亂の渦中に投じ血河屍山のなかに獨逸と戦ふにせよ、此の動亂東洋に波及せざる限りは、我れは無關係である、また無關係でなければならぬ、然るに同盟國たる英國はこの戦争に參加した、而して我が東洋に於いてはまだまだ砲火相見ると云ふ如き悲惨なことは無いにしてからが相互に商船を追撃したり又は拿捕したりして茲に風靜かにして浪穩やかなる東海を、血腥き戦争状態に陥入しめた。

時は大正三年八月七日、英國政府から我政府に向つて左の如き要求的依頼が來た、曰く

「東洋方面に於ける英國貿易威嚇さるゝが故に、之が救済に就き適當の助力を借ることを得ば仕合なり一云々。

其處で之れに應ずるは日本の義務にして、且つ我國の爲めにも多大の利益である、それからいふものは外務大臣加藤高明君と英國大使サー、グリソン氏の間に、また英國でに全國外相サー、エドワード、グーレ卿と日本駐英大使井上勝之助氏との間に協議を重ねて居たが如何にせん通信機關が故障だらけで案外相談に手間は取つたが、結局日英同盟規約の豫期せる、利益保護の方法手段を採ればならぬと云ふ意見が一致した、されば獨逸帝國に對しては、直ちに戦ひを宣し、戦鬪行爲に移るべき筈ではあるが日英兩國政府の期する所は血を流すが目的ではない、屍れの山を築くが望みではない、要は東洋の平和である、平和の手段をもつて目的を達し得らるゝならば、此れ位ひ結構なことはない、成功は覺えないが兎も角も獨逸に對し要求を爲すことに決定し、十五日に御裁許を得て同日直に駐獨船越代

理公使をして獨逸政府に、また東京では獨逸大使レックス伯に對して左の通牒を交附した、曰く帝國政府の聲明は、

帝國政府は現下の狀態に於いて極東の和平と素亂すべき源泉を除去し、日英同盟協約の豫期せる全般の利益を防護するの措置を講ずるは該協約の目的とする東亞の平和を永遠に確保するが爲めに、極めて緊要の事たるを思ひ、茲に誠意を以て獨逸帝國政府に勸告するに同政府に於て左記二項を實行せられんことを以てす。

第一 日本及び支那海洋方面より獨逸艦艇の即座に退去すること、退去すること能ざるものは、直ちに其の武装を解除すること。

第二 獨逸帝國政府は膠州灣租借地全部を支那國に還付するの目的をもつて一千九百十四年九月十五日を限り無償無條件にて日本帝國官憲

に交附すること。

日本帝國政府に於て叙上の勸告に對し一千九百十四年八月二十三日正午迄に無條件に應諾の旨獨逸帝國政府よりの回答を受領せらるに於ては帝國政府は、其の必要を認むる行動を執るべきことを聲明す。

此れを極お解り易く、俗な言葉で云ふなら、「貴下方の戦争のために東洋までも掻き廻されては困ります、其處で私はせめて東洋の平和のために貴下に二箇條の要求をいたします、其の一は日本、支那兩國の海洋方面から、貴國の軍艦は引き揚げてお貰ひ申したい、貴國の軍艦が東洋へ迂路付かれましては東洋の平和が破れて穩かでございます、直に引き揚げなさい、また引き揚げるべきが出来ない軍艦ならば、すぐに武装を解してお仕舞なさい、今一ツは支那から借地ておられます山東省の膠州灣全部を地主の支那國へ返還

してやるさ云ふ目的で一千九百十四年(大正三年)九月十五日を限つて無償無條件で私の官憲へ引き渡しなさい、此の二ヶ條の要求に就いての御返事は一千九百十四年(大正三年)八月二十三日正午までお待ちなさいませう、萬一貴國の御返事がなかつたならば、私は自分で懲うせればならぬと思ふだけ、自由を致します、ら、ごうか其のおつもりで……」

戦争は強い、如何なる大敵でも恐れはしないまた負けもしない日本帝國は、戦争が強いから云つて戦争を好むぢやない、どこまでも平和主義である、だから獨逸へ最後の通牒でも外交の例から云つたなら、通牒を發してから其の回答は一晝夜乃ち二十四時間、もしくは四十八時間と限つたものだが、飽までも平和主義の我國は外交上の記録を破つて前後九日間の餘裕を與へた、尤も通信機關不備な點からでもあらうが、九日間の回答期は日本人ならでは出来ない辛棒である、その辛棒も唯東洋の平和を望めばこそである處が獨逸云ふ戦争好きな國では「なにを小癪なそんな事に構ふて居らるゝか、回答には及ばぬ」と云つて何の返答もない、約束の八月二十三日正午を過ぎた、もう宜し、さらば我は自由行動をさるから覺悟せよ政府が起つてば舉國一致、此處に恐れ多くも獨逸に對する宣戰の詔勅を拜することになつたのである。

第二彈 (恨みは茲に二十年)

回顧すれば今から頂度二十年前、日清戦争の終局に際して獨逸は或る二ヶ國(打ち明けて云へば露、佛)と共に、イヤ其の發頭人となつて我が國に對して名を東洋平和と云ふこゝ籍つて遼東半島の還附を勸告して來た、讀者

よ、まだお忘れはあるまい、我が忠勇なる國民の鮮血をもつて占領したる遼東半島は、遂に清國に還附せざるを得ざるに立ち至つた、此の苦き經驗は、忘れやうさしても忘るゝ事の出来ない無念事である、其の當時本邦へ駐劄して居た獨逸の公使は、我が外務省に送つた勸告文は、羅馬字綴りの和譯文まで添附してあつた、曰く。

獨逸政府が日清媾和の條件を見れば貴國より請求したる遼東の所有は清國の都府をして何時までも不完全の位置に置き且つ朝鮮の獨立をも水泡に屬させ、因つて東洋平和の永續の妨げになることであること認めなければならぬ、夫れ故に貴國政府が遼東の永久なる所有を斷念なさるやうに、本政府が御勸告致します。

隨分虫の宜い勸告文ではないか、無禮なりや傲慢な文句じやないか、尙

ほ此の原文中には「貴國弱く我國強し、若し戦ひを交ゆれば、貴國敗れん」その一句があつたが、その文句だけは我が注意に依つて削除した、おもへば、此の無念、日本國民として、どうして此れを忘れる事が出来やうぞ、恨みは此處に二十年、時こそ来たれ、彼を討つべき秋は来た、天高くして馬肥たり、征獨、征獨、青島攻撃……。

扱ていよく征獨、膠州灣、青島攻撃と云ふ段取りさはなつたが、今お話しした獨逸の干渉、然も露佛二ヶ國を味方に引き入れ、おのれ發頭人となつて遼東半島還附を勸告して来た當時の次第、少年諸君のため、茲で一寸お話しするも萬更徒事でもなからふとおもふ。

元來日清戦争講和の條件は、清國は償金二億兩、それに遼東半島、臺灣を割譲する云ふ事で纏まり明治二十八年四月の十七日に假條約を締

かりで家人の心配は一通りではなかつた、されば切角掻い所に手の届く程の看護も手當も功を奏せず、病氣は段々重くなるばかりで、既に回春の望みは絶てしまつた。

其處へもつて来て右の干渉、どうにも恚うにも手の附けやうがない、流石に伊藤公もこれには思案にあまつた、なアに此れでも實力があつたら三國相手に喧嘩もしやうが何を云ふにも軍艦は云ふに及ばず、すべての兵器が充分でない悲しさには幾ら國民の元氣が勝氣でも元氣ばかりでは頼みならぬ今は科學の戰爭器械の戦ひだから三國相手の喧嘩なら、支那に勝たやうな譯にはゆかぬ、と云ふて見す／＼血で取つた遼東半島を還付と云ふことは殘念である、伊藤、松方、西郷、樺山を始め元老、大臣方は打ち揃ひ陸奥外相の枕元で協議會を開いた、其の結果二年越の戦ひに大勝利を得て大した戦

功は收めたけれども其の結局に至つて切角の遼東半島だけは殘念ながら支那に還付した、此の時から盛に流行出した言葉が臥薪嘗膽と云ふことで、先づ十年後には露西亞と戦ひ、遼東半島は我國の勢力範圍に移つて來た抑々親密な友邦露西亞と戰爭せねばならぬ不幸に陥つたも、原因は云へば皆獨逸の干渉から起つた事で、何かにつけて忌々しいは獨逸と云ふ國である、何うしても砲彈一發御見舞申さねば勘辨ならぬ……。

第三彈 (青島籠城に汲々たり)

口に平和を唱へながらに劍を抜いて居る獨逸帝國は、日清戰役に關する彼の干渉のお禮として支那に無心を吹き掛けやうとは、かれて狙つて居た所であつた、しかし其の機會が來なかつた、おまけに一千八百九十七年希土戰爭

から引き續き歐州列強國の關係の表面は和親々密と握手はして居ても、裏面では互ひに其の隙を狙つて居ると云ふ有様で、流石の獨逸も東洋までに出し兼ねた。
然るに飽までも東洋を狙らつて居た獨逸皇帝は、東洋を斷念することが出来なかつた、其處で露國と握手せねば手が出せない、全年八月露國を訪問して親交の意を表し、越えて十一月一日に山東省袁州府に於いて獨逸の宣教師二名殺害され、其の動機が山東省巡撫李秉衡の煽動なりと云ふ報であつたから、獨逸は得たり賢し、此の機を逸するなからんと同月十七日に巡洋艦四艘に命じて山東省東岸膠州灣を占領せしめ、更に皇弟ハインリヒ親王を極東巡洋艦隊司令官に任命し、更に軍艦三艘を東洋に派遣した。

此れだけの膳立をしておいてから、清國政府に向つて強硬な外交談判を持ち込んだ、而して膠州灣を向ふ九十九年間租借する、若此の期間内に還附を申し込んだ其の時は、此方は返さぬと云はぬ代りに、獨逸から投じた經營の資金全部を拂ひもぐすこと、それと此れに代る良港を割讓すること、まるで赤子の手を燃ぢ上げるやうな遣り方で膠州灣を先づく自分の勢力範囲に移して仕舞つた、これが今から頂度十七年前のこまで日清戦争三年後の事である。
日本が遼東半島を我物にすれば東洋平和に害ありと云つた舌の根の乾かぬ下から、獨逸は山東省の要地を我物にした、此れで東洋平和が更に固くなつたさは随分と虫の宜い話してないか、慷慨悲憤の俗謡が流行つたは忘れもしない此の秋であつた。

獨逸は多少の批難も列國に受たが委細構はず膠州灣の最要地青島の經營に全力を注ぎ、先づ西北の風を防ぐ大防波堤を築き、市街に水道を設け諸方に植林し、諸官衙、學校、病院、絹絲紡績工場、麥酒釀造所、煉瓦製造所を設けた、それから防波堤内には二百二十五万平方メートルにて六千噸の船舶十二般を一時に入れると云ふから大した築港である。

此の港灣の幅は三百メートル深サ九メートルと云つて居る、同地は風光明媚氣候は溫和で軍港としても商港としても、また遊覽地としても申し分のない良地である、今日の人口約六万、其の内日本人が三百人位ゐる居てゐたのであらう、元來獨逸の殖民地の行政權は、すべて外務省に屬して居るが獨り此の膠州灣に限つて海軍大臣の指揮の下に屬して居るだから兵備に至つて他の殖民地と畢なり、完備して居る、其の兵備は、陸軍歩兵五個中隊（

内第二十隊半數）と機關銃隊第五中隊（全部乘馬歩兵）夫れに野砲一箇中隊、工兵一個中隊、海軍要塞砲兵五個中隊、駐屯兵五百名、豫後備兵二千五百名で、合計六千名が常備になつて居る、それに要塞砲臺がイルチス砲臺、モルトケ砲臺、ピスマーク砲臺、イルチス岬砲臺、灰泉角砲臺を名あるものとして大小二十餘ヶ所、此の外秩序維持のため國民軍の組織もある、しかし其の頭數は千に満ないのであらふが、兎も角もイザ鎌倉と云ふ場合は結束して起つだけの用意がある、現時要塞司令官は膠州灣總督海軍大佐マイヤー、ワルナル氏である、同大佐はトルフェル中將の後を襲ふた人だけあつて中々の敏腕家の聞えもあればまた軍略家ださうな、參謀長は海軍大佐サグザイ氏である、それに現在の艦艇は左の通りである。

旗艦シヤルンホルスト△巡洋艦グナイゼナウ、エムテンの二艘△砲艦タ

イガー、イルチスの二隻△水雷艇エスクチュ△測量船コンドラ△津送船
チタニア△捕獲船ヲヤチエン（は露國義勇艦リヤザン號か）及び塙艦カイ
ゼリン、エリサベットの二隻（都合十隻）

此れだけの防備である、設備である、日本は獨逸を東洋から追ひ出すために
は、此の膠州灣青島の獨逸を破壊せねばならぬ、處が日本との國交、破れ
たき聞いては、安閑として居ない、直に戦備に取り蒐つた、尤も東洋には英
佛、露の軍艦も派遣されて居るから、萬一をも慮かつて其れ／＼防戦の用
意にして居たものであつた、しかし日本との國交に變りのない間は、夫れは
ぞ英佛露を恐れて居なかつた、寧ろ支那海を荒し廻つて商船を撃沈するか、
手捕にしてやらふと考へて居た位であつた、處が日本と國交が破裂して見
るさ、そんな悠長なこさちや自分の足許が危険くなつて、あの素連い日本の

事だから、何時、どんな所から陸軍が上陸し、海軍が舳艫啣んで來ぬとも限
らない、なんでも彼でも晝夜兼行、防戦の準備さしななければならぬ、兎に角
く戦争好きな獨逸の事だから、塹壕や砲臺を構築するやら、背面には鐵條網
地雷火、鹿柴、陷穴、殊に鐵條網には驚くなかれ、三万ボルトの強電流
を通じ、海面には壹万八千個の機械水雷を沈設し、在留民の中十八才から
四十五才までの男子は悉く徴集して國民軍を編成し、支那人の名義を利
用して北京、天津方面から盛んに糧食を搬入し、いよく籠城の準備に
日もまた足ざるの多忙を極めた。

第四彈 (膠州灣全沿岸の封鎖)

茲に日獨の國交は全く八月二十三日正午をもつて斷絶した事は既に述べた通

りであるが、これま今時に帝國政府は開戦に關する海牙條約第一條の規定に依つて、二十三日午後三時、東京駐在の締盟國各國大使に對し簡單な公文書をもつて右の旨を通告し、且つ各國駐在の帝國大使使をして夫々駐在政府に對して同様の通告せしめた、處が此處に可怪き方面に敵國が現はれた。

夫れば云ふまでもなく、抑々帝國の獨逸に戦ひ宣するは、日英同盟條の結果である、其處で獨逸と同盟國の獨逸國は全く我々は關係はないのである、されば獨逸には宣戦した、獨逸國には依然として親國交をもつて待遇に粗畧はないのであつた、處が東京駐在獨逸國大使ミュレル男は突如公文をもつて我が外務省に左の如く照會して來た、曰く。

「獨逸國政府は日本帝國政府が獨逸國の同盟國たる獨逸に對する行動

に願ひ、日本駐在獨逸國大使に對し、日本帝國政府に旅券を請求して速かに歸國すべきことを命じ來れり云々」

さ、かくてミュレル男は兩國の國交斷絶を申し入れて來た。

其處で我が外務省では「おや、左様でござるか、宜しい承知いたしました午後五時吉田秘書官をして旅券を獨逸國大使館に提供すると同時に在獨逸藤大使に對し、即時獨逸國政府より旅券を受取り取り敢へず伊太利まで引き揚げよと訓電を發した、かくして日獨の國交は斷絶の不祥を見たのであつた扱て獨逸大使レックス伯は八月二十九日に、獨逸大使ミュレル男は三十日に東京を退去し、横濱、帆米國を経由して、夫れく歸國する旅程に上つたのである。

獨逸に對する外交上の經過は大畧述べたが、扱て此れから我が帝國海陸

軍の大活動と云ふ青島に火蓋を切る序の幕である。
 爰に對獨國交斷絶と共に、廟議は宣戰の詔勅、臨時議會召集詔勅の奏請を初め、戰時行動に必要なる諸般の法規制定、地方官議會の召集等を決定し、他方面に於いては、最後通牒交附以來着々準備を調のへしめつゝあつたが、殊に陸軍海軍に對しては、疾風迅雷的に出征動員の命令を傳へたが、此處等が日本の素早い所で、命令を出したかとおもふと陸海軍は二十三日の正午を過ぐると共に、爰に一大活動を始めそれく命令の部署に向つて出動した、尤も出征部隊並びに方面部署等に關しては、軍機の秘密に屬する事だから、爰で明白に記述する譯には往かぬ、しかし、それは讀者諸賢がおひくさ本編佳境に入るに従つて推想が出来るであらふとおもふ。

さて其れから三日の後、即ち八月二十六日の朝、我海軍の一隊は早くも膠州灣外に雄姿を現はし、先づ無線電信を利用して軍使を送るべきに付き之れを迎へるや否やを照會した處、我が艦隊大公島の南約九哩に達した頃であつた、膠州灣總督は無線電信で我が希望を通知あれ、尙ほ米國領事、澳國艦長へも取次の旨を回答した、其處で軍使を送ることは中止して、再び無線電信をもつて膠州灣封鎖を宣言したその宣言は左の通りである
 本官は大正三年八月二十七日東經百廿度十分、北緯二十五度五十四分より東經百二十度三十六分、北緯三十六度七分に至る全沿岸（膠州灣租借地全沿岸）を、本官の指揮下に層する海軍力をもつて封鎖し之れを維持すること並びに右封鎖地域内に在る友邦及び中立船舶に對し封鎖區域を退去するため廿四時間を與ふべき事を宣言す、右封鎖を破らんとす

る一切の船舶に對しては國際法及び帝國と中立諸國との條約に依り、之れを處置すべし。

大正三年八月二十七日軍艦周防に於て

第二艦隊司令長官 加藤 定吉

此の通信全く終り、彼は了解したその返電のあつたば中央標準時の午前九時であつた。

如何に日本の軍隊が、其の行動が素早にせよ正可くと思ふて居た二十六日の朝、しかも國交斷絶から、三日目の早朝に、おのが目の前見渡す限りの全沿岸を封鎖されやうと思はなかつた、元來機敏の總督リイルデッピ大佐も、電信の譯文を讀むのに三度眼鏡を拭いて讀み直したと云ふから面黒い、總督既に此の通りであるから其の幕僚に至つては腰を抜かさんばかりであ

つたと云ふが、實際さうありさうな事である。

其處で總督ヲ大佐も覺悟したと見え、幕僚を一堂に集めて訓示した曰く。

「如何に防備を嚴にして、死物狂ひになれさて日本に勝さうな筈がない、そこで占領後に至り秘密の暴露されんば獨逸帝國の恥辱である、また個人にしても不名譽である、宜しく書類、寫眞、その他書簡等は燒棄して、仕舞ふが宜らふ、敵の手に委すべきは軍人の名譽ぢやあるまい、宜しく部下に命じて一物も残さぬまでに燒き棄てなさい」

と訓示的命命を下して青島政廳に掲げし、カイゼル皇帝の眞影までも燒き棄て、仕舞つた。

第五 彈

(鬼佐久間騎兵大尉)

膠州灣全沿岸を封鎖された獨逸側は背面も大事だが、まてく前面が恐ろしくなつて来た何は扱て置き防禦が肝心だと、晝は飛行機を飛ばして偵察したり、夜は燈臺其の他目標となるべき燈火は消してたゞ暗の海上を、探海燈を縦横無盡に振り廻し、警戒するさ全時に各軍艦は、港内深く姿を隠して仕舞つた、其れも其の筈我が第二艦隊は、廿七日以來全力を擧げて敵を威歴し、出たら最後だ、一撃の元に粉碎してやらふと手繰腰ひいて構へて居るが、敵も去るもの、君子危うきに近寄らずで、支那に居るだけ古聖人の訓へを聞き嘯り、姿を見せてくれない、しかし何う狼狽たものかイルチス岬、灰山角の兩砲臺から、火蓋を切つてドン／＼と大きな奴を打ち出した、
 「さても小賢しい敵の振舞いかな、應戦して沈黙させよ」と命令一下砲門開ひた我が一艦が着弾距離までズレと進んで應戦しサア面白くなつたと思ふ

時分は、何事ぞ、敵は最う沈黙して仕舞つた。
 「これだから張合がない」
 「これぢや汗も出ない、馬鹿くしい」
 此方は笑ひ話しの中に引き揚げたが、向ふでは砲臺の中に五六發も打ち込まれ、死傷もあつたであらふ、しかし此れを發表しては世界の者笑ひの種子にもなるし。
 「沈黙、沈黙、だまつてる」
 てな事で最う夫れ切り、我に損害のあらふ筈もなく士氣は益々振ふばかりであつた、しかも加藤第二艦隊司令長官は報告して曰く。
 第二艦隊は廿七日以來全力を擧げて敵を威歴し、膠州灣外今や敵の隻影もなし、此の行動中イルチス岬、灰山角諸砲臺の敵火を冒せし艦隊あ

るも、一の損害なく士氣益々振ふ、又曰く、第二艦隊は去る二十七日膠州灣封鎖を宣言せし以來、晝夜嚴密なる監視警戒を爲しつゝあるを以て、黃海方面の航路は安全なりと、此の航路が安全ならば、我が陸軍の征獨部隊は何處から上陸して敵の背面を衝のであらふか、もう其の時は山東省の龍口に先發部隊は上陸して居たのであつた、時は八月二十四日以來の暴風雨には、流石の我が軍隊も前進に苦心した、何して此の暴風雨は二十四日の午後から二晝夜に亘つての事だから、其の中心に當つて山東省東部の風害、水害は非常なものであつた、この中で我が軍人の活動は、實に目覺しいが司令官の報告にもたゞ危険を冒して短艇の固縛に縦事中後藤二等機關兵、野口三等機關兵菅原一等兵曹、渡邊三等兵曹、岩田二等水兵の五名を怒濤の洩ふ所なり殉難するに至りしを報するの已を得ざるに至りしを最も遺憾とする

ある位ひで、其の風波怒濤の中で各員の從業が如何に奮闘したか、分る、何處までも頼母しいは我軍人である、此の愛國の精神である、獨逸も強いならば、戦争は上手であらふ、兵器も充分であらふ、進歩して居るであらふが、如何にせんその精神に於いて、すでに負けて居るしかも前面の海軍ばかりに氣を取られて居る背面には、驚くなかれ、我陸軍は風害、水害のため多少前進に苦痛を受けたが、これを却つて利用して、何時の間にか平度、即墨の二要地を占領した。此の平度を占領したのが九月の十日で、即墨を占領したのが十二日おやくさ云ふ間に日州を占領した此れが即墨を占領した翌十三日の事である、しかし此の膠州を占領するまでに白砂河北岸即墨流亭間に於いて敵騎約十を驅逐し其の二を傷つけた騎兵斥候の衝突戦があつた、我鬼大尉佐久間善次

氏は此の騎兵斥候の中隊長である、あゝ我が先鋒が此處まで進んだ経路を以前に逆のほつて記述ればならぬ、即ち上陸より平度、即墨、膠州、占領までの奮闘的陸軍の大活動である。

第六彈

(山東の一角に旭の旗)

機先を制する事にかけては電火石光、其の行動の素速やさば、獨逸や支那の眼に入るべき筈がない、海軍は海軍だが、何れ陸軍もどこかで上陸するのであらふ、それは先づ何處であらふな、何れ英國と協同だから、威海衛かなイヤ榮城灣だらふ、あそこは日清戦争の頃、たしか日本が上陸した地點である、勝手は知つて居るし土地はお馴染だし、まア／＼其處らであらふと呑氣にも地圖を擴げて幾度も眼鏡拭々考へたり眺めたり、研究して居る間

に何事ぞ、意外も意外、日本軍は龍口へ上陸した、サア大變と跳ね上がりつて驚いたのは獨逸で、そんな約束ぢやなかつたさ勝手な研究が的外れたばかりに震い上がりつて驚いた、しかも驚いたのは獨逸ばかりでなかつた中華民國で候らふと納まつて居る支那が眼を丸くして驚いた、しかも中立を聲明した遠世凱、こりや耐らぬと直に戦争地帯を設定した、なぜかならば在北京獨逸公使は、日本軍の上陸は中立地の蹂躪であるさ強固な談判を北京外交部へ持ち込んだからである。

然も其の談判が毎度ながら三百的で支那政府を威嚇した、曰く。
「若し日本軍をして中立地に於てすべて自由行動を取らするやうな事ならば支那政府は此れに依つて起るすべての責任を負擔せねばならぬ、其れ承知であらふな」

「脅し付けた。支那政府は相手は相手なら一成程、御尤もの仰せでございませう、それでは私方では交戦地帯を設定いたしませう、誠にどうも意外な處に上陸いたしましたので、たい驚きましたやうな始末で、はいくすぐりに設定いたしますから」さ弱い國と云ふものは仕様のないので、支那政府は、これに對する自國の責任を幾分にも軽くするために、獨逸の抗議を其のまゝに日英兩國に通牒し、これまた抵頭平身」

「萬望、支那の中立を侵害しないやうに、また中立を仕了せませするやうに、

呉れくもお頼み申します」

「さ外交部で依頼する事に決定したと云ふ噂であつたが、果して九月三日に支那外交部は、日露戦争の際の例に倣ひ、山東省の龍口、萊州府、膠州灣に附屬する地域附近一帯を交戦區域とする旨を聲明した。

「其のまた宣言に對して獨逸は重ねて抗議を申し込んだ、その文句がまた馬鹿に毒々しい、しかも咬み付くやうだ曰く。

「此の聲明は如何にも立派だが、何を云ふにも日本が既に中心を破つた後に作へたものであるから、日本の爲めには誠に便宜である、日本に便宜なだけ其れだけ獨逸にさつては不利益である、しかも獨逸が申込んでから設定した地帯區域を、なぜ獨逸に相談しない、私の同意を求めない、こんな聲明なら幾度受けても承諾は出来ない、従つて獨逸は此の中立破壊に對し一切の權利を保留し、之れより起る獨逸の蒙る損害は、支那政府は當然其の責を負ねばならぬ覺悟して居るが宜い」

「と脅し付けた、その云ふ御本人の獨逸はどうかと云ふに、既に開戦以前から引き續き、山東鐵道を利用して、盛んに兵員、兵器、糧食を輸送し、且

支那政府と協定架設の吳淞無線電信をそのまゝ占領して、盛んに南洋獨
領地と通信を交換し居る等、自分は一層廣き範圍に中立違反を行動して居な
がら、臆面なく、宜く抗議なんか申し込んだものである、しかし此處等が我
意迫式で云ふかも知れぬイヤカイセル式である。

併し交戦地帯の問題の如きは、戦時に在りては畢竟するに空名である、軍隊
の行動は逡巡として埒の明ぬ問題に關係して居さうな筈もなく、殊に電光
石火の如き我が軍隊の活動は何者も此れを沮止する力を有し居らぬ、イヤ許
さぬのである、憚りながら自慢でないが、吾先發隊は前にも記述した通り、
九月一日をもつて豫定の地點に到着し、二日の拂曉から山東の一角地點を
撰んで上陸を開始した、先づ此の上陸部隊の報告に、曰く。
「帝國陸軍の行動は其の當初天候の險惡に依り海陸交通機關の故障に遭

遇せるも、鐵道船舶従事員の周到なる配慮と帝國海軍の熱誠なる協力
さに依り一切の障礙を排し豫定の如く昨二日已に山東半島の一角に上陸
を開始し將卒の士氣極めて旺盛なり上陸地附近に敵兵を見ず」

此の報告は九月三日陸軍省の公表である、續いて「帝國陸軍は九月二日山
東半島上陸以來時々強烈なる暴風雨の襲來を受け河山汎濫交々通屢々斷
絶せるも銳意萬難を排して前進を努め豫定の行動を進めつゝあり」
此處に特筆大書を要するは、始終天候險惡のために多大の困難に遭遇し
居ることである。

殊に上陸の前後は前にも記述した通りで山東省東部は、近年未曾有と稱せられ
た強烈悲慘な極めた暴風雨の襲來で、豪雨連日に亘つて尙ほ止まず、加之に狂
風の激するために、山東の一省は殆ど洪水に埋没せんばかりであつた、此

れがため諸川は濁水の汎濫にまかせ、堤防は破壊し、橋梁は流失し、人音爲めに生命を失ない、家屋は潰れ、物資は流がれまた埋没せられ、道路は濁水腰を没して平野は一面の海となり岡は島の如く、行進の意の如くならざるは無論の事、給養、輜重の困難は、筆にも口にも盡される事ではなかつた現に陸軍砲兵上等兵馬場金藏は所屬部隊渡河のため名もなき川の幾流れが、一ツになつて海の如き濁水の方に偵察を命られ。

「ば、ば、なにが用に立つやら分らない小供の時に水泳が一等好で、水泳のために親仁から怒られた事もあつたが、これが國の爲めにならふさは面白い偵察してやらふ」

軍服を脱が早い、剣も靴も一緒に纏め、頭の上に載て首へかけて結び着け、戦友に向つて。

「おい、行て来るぜ、俺がもどつて来るまでは一人も這入ちや不可ん、危険からな、大切な身体ぢや、水で死んぢや申し譯がなからふ」

さ、其のまゝ後も見返らず、浅瀬を探つて涉つて行く、どうも敵地に深く進んで行く身が素裸体で一人涉つて行のだから、餘程大膽でなくば出来ない事である、しかし惜いかな此の勇士、立派に任務を仕了せながら、歸隊途中、獨水の渦に吞まれて残念ながら溺死した、水練は達者であつたが、水中で痙攣を起したのであらふ、此の勇ましい大膽な武士を一人失なつた、なれども馬場上等兵の死は徒事にはならなかつた、此の瀬踏を辿つて我軍は前進を繼續したのであつた。

馬場上等兵は其の日伍長に昇進した、遺骨は九月二十八日留守師團司令部に到着、翌二十九日午後三時河内軍曹此れを受取、一應所屬部隊に歸隊し

告別の式を擧げて遺族に引き渡され、爰に馬場伍長は「俺は白骨になれば、凱旋しないから、位牌は作製へて置いて下さい」云て出征したが、白骨なつて旋凱した、なんぞ勇ましい話してないか。

第七弾 (一撃の下に粉碎せん)

獨逸側にして見るに日本海軍の封鎖宣言以來海面の防禦に努めた事は云ふまでもないが、又一方背面の防禦にも晝夜兼行、支那人を無理無体に使役して、防戦の用意に多忙を極めた、しかし、正可日本の軍隊が背面に疾風の如く上陸しやうとは御存知なかつた。

「閣下、日本軍が龍口へ上陸いたしましたでしたが、如何でございませう、直に行進いたしましたませうか」幕僚は心配だから總督へ伺がふた、するに總督は洗着

いたもので、哄笑一番。

「は、君にも似合ない事を云ふれへ、考がへて見玉へ、此の暴風雨と洪水に、よしや上陸しても行進が出来るものか出来ないものかまた行進するに於てからが給養、輜重がどうして續かふ、如何に握り飯に梅干で我慢する日本軍隊でも什麼な無法な行動はさるまいぢやないか、此の雨、此の水、此の風では、我五体一ツでさへ自由にならぬのではないか、まあ、心配しないで、たゞ警戒さへ怠たらなければ大丈夫」

さ、一笑に附して居た、しかし幾ら呑氣で居ても不安におもふに總督は兎も角防備に就ては熱心であつた、その熱心に築き上げた防禦線、砲臺、砲壘、兵の配置を此處で語らふ、先づ青島獨軍の幹部の勢力は大畧左の通りである。

▼總督府 總督海軍少將ソルデツク (大佐ヨリ昇進せしは九月) 參謀

長サツカー中佐

▼要塞 砲長海軍中佐ボツスク、工兵長海軍中佐セベル

▼海軍砲兵大隊 大隊長海軍中佐サス○第一中隊乃至第五中隊

○航空隊

▼第三海軍歩兵大隊 隊長海軍歩兵中佐ケツシーンブー○第一中隊乃至第五中隊○外に野砲隊○工兵中隊○機關銃隊

▼東亞分遣隊 指揮官海軍中佐クロウ

▼砲煩庫 掌砲大尉フアルケンサイン

▼水雷隊 隊長掌水雷大尉ドレイカー

▼築城部 部長海軍歩兵大佐セルベル

▼工務部 部長休職海軍大佐メイヤーマン

此の外に氣象臺隊、病院隊、金櫃部、衛生管理部、民政部、司法部、青島

工廠等で以上がザツト青島獨逸駐屯隊の要部なりまた勢力である。

其處で防禦線に就いて語らふ。

背面の防備は高山及び龍山に至る線を第一防備線として砲臺に至る迄の間

に五線の防備線を備へ、電流鐵條網(三万ホルド銅の裸線)鹿柴、それ

に塹壕を掘り、地雷を布設し、陷穴を設け、豫備的砲壘を要所々に配置し

殊にジードリツヒ、マイレーチエンの西方よりリスン河に至る一帯の要塞

地帯に於いては軍の主力を集めて必死の力を注ぎ、各方面より來る攻撃

軍を悉く撃碎せん意氣込み凄じく、更にピスマーク、モルトケ、イルチスの

三大要塞は、最近の築城法に依つて建設され、隱蔽法の刑式に則せり。

砲臺の地下に築かれ、地上に現はれた分は極めて厚い鋼鐵板で之れを蔽ひ
其の備砲は加農砲廿、乃至廿五珊以上、中には卅珊以上の巨砲を備へて
居る、又揚家庄、談山、龍山、女姑山、女愛日等、數ヶ所に砲臺を設け、電
話、電信の線は地下線として各砲臺、砲臺に通じ、攻撃軍の出處進退
を通知して、何者も敵として向ふに立せないこの防備は出来あがつた、され
ば阿修羅の勇ある日本軍でも、第一線を敗るにも一個師團の兵は全滅してお
いなさいと納まり返つた所は、流石に獨逸の軍器家、ワ總督である。
我が陸軍に於ては、それ等の防備は百も承知、二百も合點で、要塞攻撃に
就いては十年前、旅順攻圍攻撃に苦い経験があるのだ、たゞ山東の
風雨と洪水に行進に多大の困難を感じた、それすら萬難を排して豫定の行動
をあやまらなかつた、其の活動の勇猛は、獨逸將軍の夢にも御存知ない處で

あつた、たゞ防備は畧ぼ出来あがつた、此の洪水ちや流石の日本軍も困難し
て居るだらふ。
「神は我等を助け玉ふ」
てな神を頼みにして居るのは可いが、日本軍は昔時から天災地變を利用して
敵の油斷を衝く云ふが、一ツの軍畧になつて居るのを御存知ないから可笑
いだから平度を占領されて泡喰つたものだ、笑止く……。
第八彈 (馬蹄に蒐て蹂躙せよ)
我が勇敢なる出征軍は士氣益々旺盛、龍口上以來、連日の暴風雨の
襲來と戦ひ、濁水滿々として見渡す限り一面の海、腰を没する其の中を
敵は油斷は此處なんゆりぞ、險惡の道路に泥濘を冒しつゝ、威風堂々、敵

ちか 近くに肉迫し騎兵の將校斥候は平度にて先づ敵の斥候と平度にて一
戦に及ばず追ひ散し、要路に當る即墨を占領した、此の即墨と云ふ所は山東
省半島の一小都會で敵の戦線で尤も防備に努めて居る自砂河までは僅か
四里しかない、人口六千余、産物の多い所で、殊に落花生の産地として
有名である、しかし此の地一帯は獨逸人の惡風を受けて居るので、支那地方
と異なつて人物が良くない、誠に人柄の悪い土地である、其れは兎も角も
敵が此の警戒線を惜氣もなく捨て、逃げ失せたのは、既に我軍の電光石火
的の活動に面喰つた証據であるが、日本軍が突如此の即墨に出現しやうと
は神ならぬ獨逸ぢやもの、分りさうな事もなく青島の幹部達はまだ龍口
附近に迂路くしく居る位に思ふて居たのであらふ、逃げ戻つた斥候將
校、すぐに司令部に電話で「日本軍即墨に現はる」と通報すると「馬鹿ッ

それは支那の巡邏であらふ、よく氣を附けんさ不可ん、此の天災に遭遇して
どうしてそんなに行進が出来るものか」と吐り付けた「それでも即墨で衝突
いたしました」「なに衝突した、而して日本軍の数は」「左様、一個師團と
見ました、衆寡敵せず、本官は退却の餘儀なくせられ陣地に豫定の如く退
却いたしました」サア大變、そんな答ではなかつたさ青島司令部では寢耳に水
さ騒ぎ出した、何しろ騒いだのも無理はない、僅か中隊の騎兵斥候に出逢ひ
ながら、退却の申し譯に一個師團と報告したので、屹度驚く「然らば海面も
大切ちやが、背面に力を盡せ、明日は即墨方面は捨て、仕舞く、流亭あ
たりを警戒せればなるまい」と明日と云ふ日をまつて居る間に、我軍は流亭
方面に出動した、するさ敵の騎兵十余騎流亭近くに出没して居る、夫れ
馬蹄にかけて蹶り散せよ、我が斥候騎兵が轡を並べて驅け向ふた、不意を

喰らつて敵は敗北、夫りやこそ来たぞ、日本の騎兵だ、退却々退却ツ。」
此奴も亦豫定が豫期が一戦にも及ばないで退却した。しかも二騎は負傷し
て退却した、斯くて我軍は更に進んで何人の苦もなく膠州を占領した、こ
うなるさ丸て人間業さはおもへない、支那と獨逸が驚いたばかりぢやない
世界各國が皆驚ろいた、
あゝ我が精銳無比の騎兵隊が即墨を占領し主力を此處に集注し、更らに將
校斥候は流亭に進み敵騎を追ひ散して長驅膠州を新たに占領した、抑々此
の膠州と云ふ所るは、今こそ人口八千内外の一小都會に過ぎないが、一千年
前の唐時代では南支那の寧波と並び稱せられた開港市場として立流なく、大
都會であつた、尤もこんな古い歴史をもつて居る大都會も、市街の後方に
物資の大産地が無かつたのさ、其の港灣が餘りに深く入り込んで居て南北に

通ふ船舶の寄港地として不適當であつた爲め、可惜昔しの大都會は時代と共
に衰頹し、遂には往古の内城だけを殘して只見る一村部落さまで成り果た、
處が獨逸が無理やりに青島を租借した其の翌年になつて、支那政府は此處
に鎮守府を設け、砲臺を築き上げ、また山東鐵道の停車場を設け、農業を
奨励した結果兎も角も落花生、高粱などの産地として、多少人に知られる
處さなつた、されば獨逸は早くも此の地を警戒線として用意おさく、意
たりなかつたが、我が日本軍のために占領せられ、今更のやうに口あんぐり
さは、あんまり器量の宜い話してもなかつた。
また流亭は即墨から四哩ばかりも青島に寄つた地點で彼の白砂河を前に控へ
た三標山、老孤山の要害を扣へ敵は相當の防備もして居たが、此の方面はま
だく油斷のならぬ警戒地であることは、我軍でも承知して居るから、また

其れだけの用意もあつた。
 此の間における我が海軍の活動はどうか云ふに、左なきだに封鎖の難苦多
 大なるに、九月三日以来山東一帯を荒らし廻つた暴雨、狂風續いて九日膠州
 灣に襲來した猛烈な低氣壓は、封鎖海面を縦横無盡に荒れ狂ひ怒濤逆巻き狂
 瀾天に沖する風浪の中に翻弄せられながらも其の任務を盡せる勞苦と苦心さ
 は、さても想察の及ぶ所ではない、此の間、勇敢無比の我が海軍は幾多の
 危険と多大の困難を侵して掃海事業に従事し、敵の水雷を引き上げては爆破
 せしめ、且は強行偵察を敢行して、愈々敵の心膽を寒からしめたが、茲
 に不幸にも驅逐艦白妙は此の強行偵察中、敵の機銃に射られ、暗礁
 に乗り上げて自由を失ひ、敵前近く乗り捨てればならぬ運命に遭遇した
 此の公表に曰く。

我が封鎖部隊は暗夜猛雨を冒し膠州灣口に近接して敵を監視中驅逐艦白
 妙は灣外の暗礁に觸れ僚艦の救助を得て百方努力する所ありしも離礁
 し得ず、仍て適當なる諸般の處置をして其の乗員をして一時退去せしむる
 の止むなきに至れり。

第九彈

(天晴れなる敵前の上陸)

白妙の坐礁は不幸は不幸に相違ないが、世界の強國獨逸を相手の大戦争だ、
 此れ位ひの犠牲は當然の事である、しかも海軍の飛行機隊は金子少佐、
 和田大尉、武部中尉、大崎中尉、藤瀬中尉、山田大尉、飯倉中尉なんどが得
 意の飛行機を見せて敵陣地の大空を我物顔に飛廻し、一回よりも二回三回と
 氣流も分らぬ青島の空低く、或ひは高く飛揚して爆彈を投下し、地下の建築

物の軍艦、瀛船を擧げせしめ、敵の心膽を寒からしめたばかりでなく、海上より陸より空より獨軍を惱まして居る、其の勇敢なる動作は、先進國の飛行家を驚ろかして居る、なんぞ素破らしい活動ではないか。

さて我が陸軍に於いては山東の一角、かの龍口の上陸に満足しないで更に敵前直近く上陸せんと茲に活動を開始した。

然も此の活動は海陸協力の下に行なはれ、驚天動地、我陸軍は山東半島の南岸、勞山灣附近に上陸を開始した、先づ陸軍の公表に曰く。

帝國陸軍は我海軍と協同し九月十八日朝新たに山東半島南岸勞山灣附近に上陸を開始せり。

又我騎兵の一部は十七日早朝膠州停車場を占領し全日午前八時西方より來れる一列車を押收せり該列車には白から山東鐵道總裁と稱す

るもの乗車しあり下車を許さずして監視中なり。
又海軍側よりの公表に、曰く。

「陸軍上陸掩護の任務を有する我が海軍陸戰隊は上村翁助少將の指揮する第二艦一部の掩護の下に十八日朝山東半島の南岸勞山灣の某地點に上陸せり當時陸上敵を見ず」

愈々面白くなつて來た、此の敵前の上陸は如何に目覺しいか、聞くも語るも血湧き肉躍るの感がある、先づ敵軍上陸の次第を語らふ。

扱て今回上陸した勞山灣は、我軍が必らず上陸點と狙つて居るに相違ない位は敵も去るもの畧ぼ眼付いた、イヤ他の國なら知らぬこそ日本軍の事

だから、眼前に雲霧はす、無理無体の上陸するであらふ、されば此の方面は防備を嚴重に且つ警戒に脱りないやうに、それには先づ灣の内外には水雷

の沈設が肝腎であらふ。それに要所々々には克式野砲も備へねばならぬ。機關銃も速射砲も必要であるぞ。夫れは、嚴重に警戒したものだ。處ろが我が海軍では兼ねて夫れ等の事も偵察して居るしならば見事に防禦で見ることが出来た。一旦此處に狙つた場所を、敵を恐れて中止したり、他へ迂濶して上陸するやうな卑怯でないぞと、決死隊的の掃海事業に従事するやら、強行偵察を敢行するやら無理押しに上陸を開始したもので、また此の活動は龍口の上陸とは異なつて、敵前だけまた其れ丈に猛烈であつた。抑も此の勞山灣は青島を距る僅か十三里、即墨よりは六里、灣深くして大軍を上陸せしむるに最適當の地である。我軍が此の勞山灣に上陸すれば一日か二日の行程で敵の本陣地を包圍する事が出来る、しかし敵も此の便利な勞山灣よりみすく我が軍に上陸されるのは、一方ならぬ苦痛であらふし、また

残念でもあらふ、其處で出来だけ騎兵や偵察の大部を派遣して警戒もした。前述通り防備もほごしたものだ處かその警戒も防備もあつたものか、愈々我が神軍の現はれるが最後、敵は砂埃りを蹴たて、驀進ら、背後を見せず、進め、進めと退却した。此れもまた豫定の退却か。打ち笑ひ威風堂々、我軍は此の要點に上陸したのであつた。

第十彈 (我が陸軍の鬼長官)

我が陸軍の勞山灣上陸を掩護したのは正木中佐の率ゐる第三戰隊と上村少將の率ゐる第二戰隊の一部であつた。尤も陸軍を上陸させるまでには、我が海軍の働らきである。されば陸軍の上陸を容易ならしむべく海軍に於いては陸戰隊を組織して路を開いて、此

の陸戦隊の上陸は、先般陸軍が第一回の上陸をした龍口に於るも全様で陸軍の上陸前に海軍の陸戦隊が其の地點に上陸し若し敵兵を認むる時は之れを撃退し又は敵兵の見えざる場合は夫の附近を警戒し、陸軍の上陸を安全ならしむるのである、尤も敵前の上陸と云ふ場合には海上より艦隊の掩護を受けて敵を驅逐し或る地點まで敵を追撃し、上陸地點を確實に占領した後徐るに陸軍を上陸せしめ其の戰鬪準備が出来るをまつて陸戦上のすべてを陸軍に引き渡し、始めて艦隊に引き揚げるのである、此れが海軍陸戦隊の勤務である。

抑々今回敵前の上陸に際しては、かれて海軍に於ては航海を安全ならしむるため、極力掃海に努め更に上陸地點の敵状を知るためには數回飛行機を飛ばして詳細に其の状況を探り知り九月十四日青木少佐の驅逐隊が多大

の危険を冒して勞山灣の強行偵察を敢行し、海岸の監視哨舎を撃壊したも、これが爲めである、而かして此の細心の注意に依つて今回の上陸地點は幸ひにも敵を撃壊し、我は一の損傷もなく陸海軍すべての行動が最も完全に行なれたのである。

我が文庫愛讀者諸賢よ、諸君は今回我が勞山灣上陸に於て苦心慘膽たる掩護大成功と陸戦隊の任務を完了したる海軍陸戦隊の指揮官を任命された、海軍中佐正木義太氏の武名は記憶に新たなる所であらふさおもふ、全氏は明治廿三年海軍兵學校出身で三十二年九月に大尉に昇進し日露戦役に際しては第一回旅順口閉塞に、第五武陽丸に、第二回に於ては米山丸に指揮官として壯烈なる閉塞を企だて彼の軍神廣瀬中佐及び白石(葭江)大尉等と共に勇名を滿天下に轟かした、武俠の權化とも云ふべき

勇士である。しかし其の豪膽なことは夙に海軍部内で第一の人として名を唄はれかの日本海々戦に於ては眇たる哨艦和泉丸に乗り込み優勢な波濤の大艦隊の間に押し進んで敵と協同的の動作をもつて有益な報告を齎らし以て敵味方を驚倒せしめた石田鬼少将でさへ舌を巻いて談此の事に及ぶさ毎度眼を皿にして一俺も人に負けるのは嫌ひで居るが正木の大膽には驚ろいた五尺四寸の五体ありや皆な膽ぢやらう」

と、感心されて居る位ひ、尙ほ最近軍艦金剛の造船監督官として英國に派遣され、同艦の副艦長に任ぜられ、將に回航の途に上らんとする前、過りて艦橋より上甲板に墜落し、負傷した爲め獨り異郷の病院に治療中であつた、しかし一時は回春の望みなしきまで傳えられたが、天は有爲の人を殺さず武運自出度全快し、無事に歸朝したが如何にせん左手が利かない、腕

も利かないがきかぬ氣の中佐は隻手尙ほ現役に止まるのみならず、今回第二艦隊に屬して出征し、陸戦隊指揮官としてまたく勇名を天下に轟ろかした人である。

扱て我が陸軍は既に龍口及び勞山灣に上陸したが、其の司令官は誰かさ云ふに、此れぞ陸軍部内に於て出征軍司令官として適者適任、支那通をもつて名ある鬼將軍神尾中將である、また參謀長としては此れまた我が參謀部に於ては頭腦明晰、一度目を通した地圖ならば、二度と擴げずとも暗記に覺へ込んで居ると云ふ良將軍で、參謀本部總務部長の職にある、此處に四ヶ年、今回攻圍軍參謀長に任命される程の山梨少將である、茲に兩將軍に就て語らればならぬ。

第十一彈

(上陸部隊の一働き)

支那道の神尾將軍、あゝ神尾鬼將軍、出征軍司今官としての神尾中將に就いて少しく語らねばならぬ、すべて良將を讃するに昔から智仁勇兼備と云ふ語があるが、その三徳兼備と云ふ事は、先づ現代に於いては神尾將軍に於ても最も適當した言葉であらふ、實際將軍は戦術には極めて明るく帷握の裡にあつて大作戦を計畫するに云ふことは今の陸軍中將中でも稀に見るの良將軍で頭腦明晰殆んど作戦上に於ては豫言者の如き先見的智能をもつた人である、久留米師團の一兵士が出征に望んでの評に曰く、「閣下は、蓮根食さんなほるけん、宜かはい、私達もガマサレますばい」此の兵士よく將軍の人さなりを知て居ると云はればならぬ、その言葉は久留

米言葉で一寸分り兼ねる人もあらふが、此れを譯り易く云ふと、蓮根食さんなほるけんは先きが見える、先見の明あるを、久留米博多附近では蓮根食と云ふから、つまり蓮の根の穴からさつた言葉で將軍の先見の明あるに心服し安心して「ガマダサレますばい」奮闘が出来ると云ふ意味である。又將軍の實戦に経験深いことは今更ら云ふも野暮の骨頂、諸君も御承知の通り二十七八年日清戦争には大山大將の率ゐた第二軍の參謀にして旅順威海衛、金州等に轉戦し幾多の勳功を樹て、三十七八年日露の戦役では善通寺師團所屬の旅團長として軍神乃木將軍の麾下に屬し旅順の攻撃に參加し偉大なる戦功を現はし續いて奉天の會戦に於いて勇猛を以て敵味方を驚ろかし鬼將軍の名を唄はれた。

何様神尾將軍は早くから支那と云ふ國には注意を怠らなかつた人で明治

十三年頃教導團に小隊長の時代から日本は將來支那と一度は戦はばならぬ事が起るに相違ないを信じて居られたもので、以來一意専心支那語と全國の事情から各省の風土人情まで研究し、かの日清戦争前には四ヶ年間支那公使館附を命ぜられ其の後も支那の研究を怠たらず、今は我が陸軍部内では支那通として、第一位の人である有様であるから、今回の任命は實は適材を適所に置いたものと云はればならぬ、此の長將の幕僚にまた參謀長として山梨少將と云ふ我が陸軍部内で屈指の俊才がある少將に就て少しく語らふ。

出征軍參謀長少將山梨半造氏は、前にも述べた通りで陸軍部内では、屈指の俊才の聞えある長將である、日露戦役の當時は第二軍の幕僚で出征し夙に頭腦明晰の參謀將校として令名の高かつた人で其の歩兵操典に通

曉き事にかけては實に陸軍部内でも評判の俊才で道樂は讀書、しかも軍事上の書籍は如何な高價なものでも購求しないこと云ふ事はない其のため何時も貧乏である、書籍のために年中素寒貧である、また文學美術にかけても一家の見識を有つて居る、溫和篤實の人で部下を愛することにかけては、まるで我が愛子に對する其のまゝで下級の者に始末目を付け撰抜して昇級させる活眼のある人である、出身は神奈川縣で本年五十才である、明治十九年歩兵少尉となり、二十八年大尉、三十七年中佐、四十年大佐、四十四年少將と昇進し參謀本部總務部長であつたが、今回征獨の參謀長として出征されたのである、長將の下に弱卒のあらふ苦なく、征獨軍の活動の目撃しなかに我の騎兵隊の奮闘は實に素破らしいものである現に十八日の戦限こ

「勞山灣に上陸せる部隊は十八日王哥庄（即墨東方約六里）西南山險に於いて堅固なる防禦工事に依り機關銃を有する敵を攻撃し日没頃遂に之れを撃退せり敵は彈藥、軍帽、帶革、眼鏡、天幕、器具、寢臺等を遺棄し、倉皇退却せり、我に損傷なし」

此の戦報は陸軍省の公表であるが敵も切角堅固な防禦工事を建築し機關銃まで備へて居ながら「日本軍なら叶はれへ、それ退却だ軍帽から眼鏡まで遺棄て退却た所るは餘程泡食つたさ見る、なんでも獨逸の事だから例に依つて例の如く歩哨の奴がチラリ日本の陸軍と見たから驚るさながら其處は軍人」

「氣を附け、日本軍肉迫の模様あり」の注意をした、するさ中隊長、晝寢の寢臺から欠伸まじりに起き上がり、ズボンの帶革もめめないで。

「宜い氣持で寝てるのに、なんだ脅かすさ云ふことがあるが、馬鹿ッ、日本が今頃なにしに来るもんか、一遍面を洗つて來い」

「それでもあれに見ゆるぢやありませんか先づ八百米突でせうがな」

「なに、眞個か、馬鹿ッ、それなら夫さ何故早く云はないのだ、確かりせい包圍でもされたら生命だぞ」

中隊長は兩眼鏡をさつて遙か山の谷間を眺めて居たが果して歩哨の報告した通り日本軍であつたから驚ろいた。

「あッ、敵だ、敵だ、銃だ、銃だ、機關砲を早く、打て、早く打てッ號令かける耳の邊りに、ブーンと迂鳴つた小銃彈の風切る音に、手にした眼鏡を取り落し、そのまゝ天幕の下にもぐり潜り。

「敵は百五十米突、我軍退却」

退却の號令には何をおいても文句なしに服従する獨兵だから、なにもかも放つたらかして退却した「もしく、中隊長殿、貴官のお帽子はごうなさいました、お頭に戴ておりませんな」「道理で何んだか頭が軽いとおもふた、まア宜いば、隊に歸るご一ツ替があるから、生命には替られぬ、棄ておけく」「眼鏡はお取りになりましたか」「また買うから放つて来た」「だつて昨日お求めになつたやありませんか」「ウム、ごうも明瞭でないから棄たさ」「こんな調子で何にも彼も放り出したまゝ退却した、しかし如何に要塞に籠城するにせよ寢臺まで持ち運ばせて涼しい木蔭で晝寝しながら、警戒する軍隊のこの世界にあるだらふ、流石に獨逸の軍人は察いものである、感心ださ云はねばならぬフロン……」

第十二彈

(鬼大尉流亭に戦ふ)

勞山 上陸部隊は王哥庄を占領した、此の日乃はち九月十八日に日獨兩軍の前衛は流亭附近に衝突し、我が騎兵佐久間中隊長は名譽の戦死を遂げられた陸軍省の公表に曰く。

我が騎兵隊は十八日白砂河右岸流亭附近に進し十一時三十分頃より約一時間に亘りて、對岸狗塔阜附近に據れる敵と戦闘を交へ中隊長騎兵大尉佐久間善次戦死し兵卒二名負傷せり、敵の死傷は少なくも十名を下らず此の戦闘には有利なる偵察効果を得た、果を收め之れに依りて白砂河左岸一帯の敵状態を確かめ特に狗塔阜附近には砲數門を有する約二百の歩騎兵あることを知り得たり」

尚ほ此の戦闘に就て敵方の公表に依るに成が佐久間大尉を失なつた如くに獨逸側にも大した損害がある曰く。

「青島前衛戦開始さる、十八日租借地の北境界鐵道線より一哩半、流亭附近にて交戦あり、駐支獨逸公使館二等書記官なる豫備中尉男爵リーテ

セル第一に戦死す」

噫、我が出征軍幹部はそも誰々か、既に前にも述べた通りで、司令官には神尾(光臣)中將、參謀長には山梨(半造)少將、旅團長には山田(良水)少將、堀内(文次郎)少將と云ふ揃ひも揃ふた強將揃ひ、その部下に屬する人々に、また弱卒のあらふ筈もなく殊に各將校の人々には何れも鬼さ名に付く荒武者の顔揃ひである、中にも我騎兵大尉佐久間善次氏の如きは、實戦の經驗は遂に日露戦役に於て沙河、黒溝臺、奉天の大合戦に参加し

て、武勇拔群の譽れある名を擧げた程の勇士で聯隊の下士卒まで鬼大尉と呼んで居た、此の人の事だから今回名譽の戦死を遂るまでに、如何に奮戦されたかは當時の新聞にも掲載され武俠の權化さか軍人の模範さか、武士道の人であるさか、あらゆる賞讃の辭を并べてあつた事だけでも其の人格と勇武であつた事が証明されて居るのである、私は此の佐久間大尉の武名を文庫愛讀者諸賢へ語ることをまた此の上もなき光榮と存じます今其の經歷を記述

る以前に於いて少しく當時の模様をお話しやうとおもふ。抑々山東半島に於ける征獨軍最初の戦闘に於て我が軍は中隊長を失なつた程の戦闘であつたから相當に激戦であつたらふさは、諸君も御推察で

あらふ、然り、一時間余に亘る激しい戦かひであつた。

尤も騎兵の戦闘であるから佐久間大尉の率ゐた中隊の任務は偵察事業であ

つた、大體の場合に於て偵察事業に従事した以上は出來得る限り戦闘を避け衝突をしないやうに、而して敵の行動を探るのであるが、中隊長などの率ゐる偵察隊になるに左様でない、所謂強行偵察隊なのであるから、何うしても威力をもつて敵を馬蹄に蹂躪し其の目的を遂げればならぬ、佐久間大尉は此の任務の下に本隊を發して強行偵察のため進發したものであつた。白砂河右岸の流亭と云へば即墨よりは僅か四里の行程で其の道も可なり平坦である、敵は此の附近三標山、老虎山等に嚴重な第一線防禦線を布き此處で第一回の戦闘を開始し、我が軍の行進を喰ひ止めんと努めたもので、其の警戒と云ひ防禦と云ひ、實に列れり盡せりであつた、我が勇敢なる鬼佐久間の偵察隊は既に此の防禦線を突破して深く敵地に侵入して重大なる偵察任務を盡したのである。

扱て此の任務を完了しイザ引き返さうとする折柄、敵も監視を怠らなかつたから、それと云ふ間もなく二百有余の歩騎共同の敵軍が其の歸途を遮ぎつた、しかも八門の野砲機關銃を押し並べて打つて出た、斯くさ見るより鬼佐久間、物々しき敵の振る舞かな、馬蹄に蒐けて蹂躪せよと號令一下目に余る大敵の中に突き入つて、茲に白兵戦を開いて意外の激戦となり大尉は名譽の戦死を遂げた、しかし此の戦闘は大々勝利を得て歸隊したばかりか、豫期以上の効果を收めた。其の殊勳、その武勇、大尉は即日少佐に任命された、死して餘榮あり、大尉地下で微笑を洩して居るのであらふ。因みに、上記述べた所るまでは大尉としてお話をしたが、今後は少佐に昇進の任命があつたから少佐とお話することになるから、どうか其のおつちも

りて御精讀下さい。

第十三彈

(寒中の行水と水泳)

我が陸軍騎兵 鬼少佐 佐久間善次氏は、舊水戸藩の藩士で、慈父は善太郎と云つて、劍道は一刀流の達人で、藩中の子弟に斯道の師範者であつた、阿母は矢張り、張全藩の三谷家の出て、貞婦の聞え高き人であつた、少佐には一人の賢兄がある、貞男さんと云つて、今に健全である、少佐は明治十一月十二日二日生れて、當多三十七才で云はれ、御奉公盛りであつた、而して前途に多大の望みを屬せられ、陸軍部内でも誠意に評判の宜い仁であつた、今少佐の戦死の報に接しては、死は軍人の覺悟である、名譽である、悲しむべきではあるが、哀惜に堪ぬ次第である、少佐 所属聯隊長 白井騎兵大佐は、哀惜の涙ながらに少

佐の人となりを語つて曰く。

「佐久間少佐は聯隊第一の勉強家であつた事は誰知らぬものもないが、中隊長として、其部下の指導、統御宜しきを得て、非難すべき欠點は一つもなない、萬事責任を重じ、極めて嚴格で、將校中の模範であつた、少佐は職務の傍ら、精神修養に努め、常に禪學に心を寄せ、禪寺梅林寺に於て禪に參じ、居が嗜好は何事も研究的にて、碁に將碁が好であつた、日露戦役には騎兵二旅團に屬して、黒溝臺附近の會戦に參加し、ミスチエノ將軍の騎兵團と奮戦し、彼有名なコサツク騎兵を驅け、惱まし、偉功を奏した勇士であつた」

此れ位、彼の武勇の少佐、しかも世界の強國獨逸を相手の曠の戦役に參加して、敵の歩騎共同の二百に餘る大敵の中に、猛然として突入し、奮戦一時間、而して任務を完了し、名譽の戦死を遂げた血史の幾頁に、特筆せられ、武名を

千載に殘したのであるが、其の少佐の経歴は如何に、先づ少年時代から語る
 ことにしやうとおもふ。
 水戸藩と云へば徳川御三家の隨一、天下の副將軍として萬民の尊敬したお家
 柄である、佐久間家は水戸家譜代の家臣である、祖先の武功は省畧するが
 少佐の殿父は前にも一寸述べた通りに、武術は一刀流の達人で佐久間善太郎
 の名は劍道に心ある人の中でも誰知らぬ者はなかつた、されば藩の若殿原
 は其の門に集まり教へを受けるを名譽としたもので佐久間先生の名は水戸の
 誇りとなつて居た。

武臣錢を愛せず佐久間先生は、劍をさつては天下に恐るべき無しと唄はる
 達人も一家の經濟の事に關じては、如何にして一家を支えて行か、如何に
 して衣食住に不自由なく日を送るか更に御頓着がなかつた、一家の經濟に

も不自由勝なのを、兎に角切り盛して行く妻の苦勞も御存知なく、武器、殊
 に刀劍に至つては、宜いな、これは確かに斬れるな新刀ではあるが大丈夫、
 戦場の役に立つ。値は知らぬが買つて置うてな事で買ひ入れる、するさ間も
 なく刀屋が出て来て、旦那、宜い古刀が手に入りました御鑑定願ひませうと
 持て来て見せる、するさ見るだけぢや納まらぬ「成程、立派なものぢや、値
 は幾何か知らぬが一寸此れ位ゐるの刀は出ない、買っておくぞ」

さ最う見て宜いと惚たら手を放さない「何うせ賣物でございますから、お願
 ひ申します、が、實は先日の新刀の代價を頂だきませんで、何ちらか今日
 お下願はれませうか」「左様か、よし／＼今に奥へ相談しておく明日でも受
 取に来るが宜らふ」

急様調子で買込まれては奥さんの經濟の苦しきは一通りではなかつた、それ

に少佐の父は慈善家であつた、出入の者から附近の者が、難澁して居るを聞いては捨て、はおかぬ、お金の持合せもなく、施こすべき米もない其の時は着てる羽織を脱いで、も恵むと云ふ遣り方で年中佐久間家は貧乏で押し通し絹物と云つては拜領小袖の御紋服の外は木綿物ばかりで少佐の少年時代の貧乏は、それこそお話しにならなかつた。

其のまた貧乏を苦にする位であつたなら、多少の蓄財もあつたであらふが一家擧つて貧乏を苦にせぬ人のお揃いで少佐兄弟共によく父の氣質を受け續で、お正月であれ盆であれ、一張羅の綿服で押し切し寒中に綿入を着るでなく、裕に襦袢、それにお羽織、足袋なんか少年の頃から足に着けたことがない、殊に少佐の少年時代の腕白と来ては非常なもので塾の歸りに寒中でも川に飛び込み水泳をやつて平氣であつた、宅へ歸ると先づ兄さんを引ッ張り

出して「寒いから一本お願ひ申します」と竹刀を擔ぎ出す、兄さんも、宜し来た、汗のでるまで打つて来い」こんな調子でボン／＼と叩き合ひ、汗になる水の水の行水、全身の汗を流して「お蔭で暖かく成りました」と喜びながら今度は書齋に駆け込んで論語の素讀をやる、忘れた所は兄さんに、それで分らぬヶ所は阿母さんに教へて頂く、晝夜にかけての勉強は夏は土用稽古、冬は寒稽古、春の花も見ず、秋の月も知らずに勉強した、斯くて七才の春から小学校に入學した、たまへ一ヶ年にせよ論語の素讀をやつて居る少佐には小学校の讀本などは、あまりにお安ッほくして讀む氣にもなれなかつた、しかし勉強を怠たる人ではなかつた、かくて小學を卒業して少佐は水戸中學校に入學した、處が不幸にして父母に死に別れの不幸の孤兒となつた。

第十四彈 (こん畜生怪からん)

哀れ孤兒となつた善次君は水戸の中學に入學したが父母の遺産なき身は學資の出る所もなく苦學するの餘儀なかつた處が其の頃水戸に育英會と云ふ俊才の士を養成するの機關が設けられてあつた。善次君の俊才は夙に小學校時代から認められまた勉強家であることも評判になつて居た其處で育英會では善次君が貧のため、また學資を得るの途なく、萬一癩學でもするやうなことがあつては君一人の不幸ばかりでない。舊水戸藩の不幸であるを、茲に君を貸費生と選抜して學費を提供することにまつた。

後年天下に名を成する人、貸費生、つまり人に慈善で學問するのが、そうし

てまでも學問せればならぬ、自分は獨立獨歩で立つ、どこまでも他人の力で勉強したくないと男らしく拒絶した、しかし育英會では何處までも君の高潔な精神と人格に惚れ込み、無理遣りに學費を送ることにした、其の時善次氏は感涙に咽びつゝ、「不肖善次も夫れほどまでに人がましく思召す御厚意に對しましては、何とお禮の申し様もございませぬ、然らば御配慮に預かり他日御恩に報ゆる事に致します」やつと納得して學費を貰ふことにした、扱て安心して勉強が出来るやうになつた君は、いよく奮勵天性の才能を發揮して常に首席を占めて動かない、それに膽力はあるし、腕前は幼少の頃より劍道の達人と唄はれ幾百の門下を養成した父善太郎氏の一刀流を仕込で貰つて居るし筋骨は少年時代から足袋を知らず綿入の着物を着、このない位ひに鍛ひ上げて居る丈けに益々

發達して角力であれ、剣術であれ水泳……水泳さ來ては寒中でも日に一度は五
六才の頃から稽古して居るだけに一層うまい、されば何をやらしても出來ぬ
と云ふ事がないだたら、上級の生徒の頭を押へて何か事ある時には毎度牛耳
を捉つて頭目さ仰がれて居た、頂度二年級の春であつた、五年級の或る生徒
が、或る女學生に懸想して艶書を送るべく認めて居た、其れを校庭で取り落
して了つた、しかし御本人は少しも心付かずに居た。
此奴を拾つたのが善次君で、右の艶書の表面から裏面まで見るなり「彼奴、
怪しからん風紀を亂す痴漢である、こんな奴には意見や忠告では駄目である
宜しく此の校庭の真中に引き摺り出し鐵拳の制裁を加へねばならぬ」と艶書
を驚擲みにして驅け出した。
今五年級の校室に驅け上らんと階段を二ツ三ツまで登つたが、イヤまで暫時

「鐵拳の制裁は最後の手段である、年長者なり上級者である、此處は恥を
掻ける場合でない、宜しく忠告して用ゐざる其の時は、また制裁の加へや
うは幾らもあらうと、靜かに階段を登つて其の艶書の本人を差し招き笑を合
んで「君、手が隙てるなら一寸顔をかして呉れ玉へ、なに一寸で宜いから
悪いことぢやないよ」女學生に艶書でも送る程の男なら活發と云ふ氣は微
塵もない優しい顔「おっ、佐久間君かい、此處に來玉へな、宜いから此處
へ來玉へな」イヤちと君秘密のお話だからな、其處では些と困る、イヤ僕も
り君が困るだらふとおもふ、だから一寸で宜いから下まで來てくれ玉へ、す
ぐに君濟むことだからな」
「ぢや行かふ待つて居て呉れ玉へッ」
件の學生は何だか不安の顔色で今の佐久間の一言で何か思ひ當る事でもあ

るやうに頼りそ其處らから探し廻つた、殊に身の廻りから書籍を振つたり靴
をさぐつたりして居るそれが如何にも狼狽して居る様が見るも笑しいやうま
た氣の毒でもあつた。

「おい何を愚圖ついで居るのだ早く來玉へな氣の長いな君は、早くサ」君
もまた忙しい男だな、些々用もあるが先づ君の用から聞くこゝにしやう」

「左様だ、其れが宜い」

善次君は件の學生を件なふと校庭の隅に誘ひあたり誰も居ないから此れ幸
ひと件の艶書をポケットから掴み出し「おい、君も此度馬鹿な眞似は止玉へ
拾つた本人が僕だから宜いやうなもの、事あれかしのものに拾はれて見玉
へ、君一人の恥辱ばかりぢやない、學校の風紀に關する事件なんだから忠告
さ云つちや失禮だが、どうか止めてくれ玉へ、改めて受取り玉へ封も損じち

や居ない筈だ、宜いな、分つたな君、しかし僕は言つさくぞ君にして改
の情なくば、年長も上級も僕の眼中にはないぞ、直に鐵拳の制裁だぞ破つて
棄て玉まへッ」

優しい中にも犯すべからざる嚴格な言葉に流石の男も恐氣立ち、頼りそ低頭
して「御忠告有難い、唯に他にも洩さないでこゝして秘密を守つてくれた君
の同情に僕は感謝する、見てくれ玉へ此様して破るから君も忘れて呉れ玉へ
今後君に御心配かけるやうなこゝは斷じてしないから」

此れでも温順に處ながら無事で済だが、相手の出様次第では口より先きに
鐵拳を御見舞しかれぬ佐久間善次君であつた。

第十五章

(天晴見上げた居候)

我が善次佐久間君の學生時代は、手も附けられぬ亂暴ものであつた。或る新聞で見たやうにも思ふが決して亂暴な學生ではなかつた。尤も小學校時代は殊の外腕白者であつたが、育英會の貸費生となり中學校へ入學してから云ふものは、學生の体面に關するが學校の風紀を亂す様な學生に對しては、一度は忠告もするが二度目には誰彼の用捨なく鐵拳の制裁を加へ威力で上級を壓倒したもので、風紀會を組織したも君であつた。だから或る一部の較弱な學生からは表面では交際するも親密の様に見せかけても心中ではイヤな奴だと憎まれて居たのは事實であつた。

處が善次君は軍人希望であつた、されば水戸中學を三年で退學し育英會の貸費を斷然謝絶して東京に遊學した、而して身を歩兵中尉板橋直虎氏に寄せて食客となり玄關番となつて成城學校に入學した。

朝は暗い裡に床を離れて水を汲み薪も割り、雑巾をこつて拭き立て、庭を掃き、釜の下まで焚付けて、それから水浴をやつて机にもたれ讀書の人となる、其處で夜が明けると云ふ始末で家人の床から離れる時分には、もうなにもかも朝の仕事が出来て居る、だから家人は大喜び、殊に下女君の喜びは非常なもので佐久間さんくで賣けが宜い、なアに御當人にして見ると、下女に愛想をして讀ませよう云ふ穢ない魂性は微塵もないが、十分間でも學業の餘暇でも閑然として構へて居ることが出来ない性分なるさ、一ツは板橋家に養はれ學校にまで通はせ貰ふの厚恩に萬分の一に報おんさ云ふ考へで働らく、然も其の盡す云ふ精神が、赤心から出るのであるから立派である奇麗である、影陽がない。

こんな居候が滅多に居るのでない、それに主人が感心したのは善次君には居

候魂性云ふ卑劣い魂性が微塵もない、主人を始め家人に對する誰れ彼れ
 なしに禮をもつて盡す云ふ點が少しも變らない區別さしない、殊に老人を
 敬するさいふ美しい心かやがて弱ひ者を愛する云ふ心なので、自分より
 も年の下の者に向つては何處までも親切である、學校の友達に對する友愛の
 情も、下女に對する交りも、親切で誠實で、決して偽言を吐ない、何處まで
 も几帳面である、それで居ながら怒つた顔を見せることがない。
 下女さ居候、大体仲の悪いもので、犬さ猿なのが世間の相場である、善次君
 は左様でない、下女から始終賞められて居るなんにも譯の分らない虫全然の
 下女でさへ、佐久間さんは偉いお方や、屹度御立身遊ばすに相違ない口癖
 のやうに云つて居る。
 善次君は日曜日になるさ屹度盟の詮議をする、それが板橋家へ寄食してか

ら毎週變つてこがない「おい下女君、今日はお盥はあいて居ますか子、一
 寸二時間計り拜借したいが」「お使用遊ばせ大方今朝は御入用だらふさお
 もふて出して置きました、またお洗濯なんですか、なんなら妾が洗濯つて上
 げませう、シャツですか」「有難ふ、君はまだ御當家の御用だけでも大抵ぢ
 やないのに居候たる我輩の事まで手を出しちや勤らないよ、僕は僕でやりま
 すよ、なアに君一週間に一度の洗濯だもの、ちや一寸拜借いたします。」
 自分の事は自分で所置する云ふが善次君の主義であつた、であるから軍人
 さなり中隊長となり、中隊長の長官さなつても、他を煩らばす云ふ事は決し
 てない、殊に誰だつて真似の出来ない事は、靴磨きである、中隊長になつて
 出征し、名譽の戦死を遂るまで靴を他人の手で磨て貰ふ云ふ事は、修履
 を頼んだ時だけで不斷は自分で磨たものだ。

夫ればかりでない、服の事から馬具の事から自分の手で出来る事なら自分でやる從卒などに任せた事がない、三十七年の一生涯、女の世話を受けずに死んだ位にの人だから女のすべき針の事まで知つて居た、器用さ云へば其れまでだから自分の事は自分でする主義から自然針まで手にする器用になつたのである。

第十六彈

(相變らず勉強か)

板橋家の居候さん我が佐久間善次君の働らきは述べたが扱て成城學校生徒として佐久間善次君の成績は何うであるか云ふと、水戸中學校で磨き上げた腕にまた格別、体育であれ學術であれ其の成績は優等ならざるなしで殊に品行方正な點に於いては校中第一と稱せられて入學早々模範生として

優待せられ、また特待生として月謝全免の特點を受けたものだ。

時は三十二年の四月上旬であつた、全學年の學友五六人附近の蕎麥屋で落合ふた、話は圖らず佐久間君の事に移つた、甲曰く「佐久間の眞面目なのに、おそれ入る子、昨日だつた、おい佐久間、小金井に散歩さ出蒐やうさおもふが賛成せんか誘ひにかゝるさ子、奴さんの曰く、今頃、小金井に何しに行かかの反問には恐れ入つたネ、今頃て君、櫻花の盛りだぞ云ふ、又曰く、櫻、つまらんな、花がなんだ、僕なんかは僕自身が不斷の花さ咲き誇つて居るから子、他日國家の干城となり一朝國家に事あるの日は敵彈さ云ふ春の嵐に見事に散て見せる考へだ、花が見たくは僕を見て居るが可いさはさうだ、あんな頑固な男もない子、なんさかして奴さんを引ッ張り出す工夫はなからふか子」

乙其の語の盡るを待つて曰く「は、君も一本やられた子、實は僕も遣れ
たよ、二三日前の事さ、おいどうだ上野に行かふ、散歩しやうぢやないかさ
誘ひ出さうとするさ先生曰くサ「何、上野、上野なら図書館かこ来たらふ、
ウム左様ださ云へば宜かつたを、僕もツイ先生の眞面目なるに釣り込まれ、
正直に左様ぢやない、花見にサ云ふさ笑ひ出したよ、學生がお花見さ酒
落臭ひ子、第一君達が花を見てどんな感じが起る、花を眞個に見て賞するま
でには前途遠達だ子、見られた花が泣げ、可愛さうに、寄し玉へこ来た、子
イヤどうも先生は唐變木だ、我黨の士ぢやないさ斷念した」こんな調子で較
弱な學友達は、幾度か悪所へ誘ひ出した手を盡したが、其の手に乗るやう
な善次君ではない、花もなければ月もない、たゞ學問と体力を養成するさ
云ふ外に、何者も眼中になかつた。

頂度其の月の十日は、明治天皇、遷都の三十年で東京では遷都三十年の大祭
を執行了した、三百萬の東京市民は此の祭典を如何に盛大にすべきかに狂奔熱
中した、まるで此の祝賀騒ぎは市中の隅から隅まで沸騰せしめた。
無論學校は此の日祝賀の意を表すべく臨時休校した。
また東雲の頃より花火は上野、二重橋外、兩國、淺草、芝の各方面にボン
／＼打ち揚げて居る、町内に花傘、紅提灯を吊して祝意を表し、人は東西
に馳せて今日さ今日、陛下の御幸行、皇太子殿下のお成を拜せんさ、二重
橋外に設けられたる、祝賀祭場に馳せ集る、しかも花車に山鉦、作物、
俄手古舞、火消組の木遣、夫れから夫れと練り出したさ、人は留守居も
なくて飛び出すを、今日も餘所事にして讀書三味の善次君、やがて朝の食
事をすまして部屋へ戻るさ、主人の板橋君、

「ヤア相變らず遣て居る子。感心く、併し佐久間君、勉強も宜いが、健康を損なうちや不可、國家の干城たるべき身を以て健康を害するやうな勉強は考がへもんだ子」
 「はい有難う存じます、体育云ふ事が大切ださ、夫れは片時も忘れはいたしません、御覽の通りお蔭でこんなに肥大てまわりました腕ッ節を叩いて見せた、成程身柄は大きいが爲ること成すことが天眞爛漫、まるで子供のやうで無邪氣なものであつた、板橋君は心の中で「成程、これなればこそ人にも愛せられる譯で憎もふさおもふても此ちや憎まれぬさ今更のやうに感心し、益々前途に望みを屬し世話かひあまをこそすえたのも思ひながら、君は左様云ふが顔色が悪いよ、散歩にでも出掛玉へな、幸はひ今日遷都三十年の祝賀の當日ぢや、再度さないお祭なんだが散歩旁々見て來玉へな、今日に限つた勉強でもあるまいし、見て來玉へ」
 「はい有難う

「ございます、私留守致しませう皆さん御出蒐になるでせうから」
 勧めても誘ふても動きさうな氣色もなかつた、板橋君は笑ひながら「もう君、皆な出蒐けたよ、残つて居るのは手を痛めてる僕さ君だけだ、今日は僕が手痛で留守居役として君出蒐け玉へ、少ないが、今日のお小使ひ、さつてくれ玉へ、ほんの馬車賃だけだよ」
 板橋君は一圓紙幣五枚を机の上に載て部屋を出やうとするから佐久間君、其の袖を捉へて右手に紙幣をガツと差し上げ、御厚意有難う存じまするが書生の善次。たさへ御言葉に甘へ散歩にまゐりませうともこんな澤山頂戴いたしませんでも不斷お小使頂戴いたし居りまするのがまだ懐中に残つて居ります、これはお返し申します、何れ入用の節改めて頂く事に致します」
 「宜いから取つて置き玉へ、今日一日に使用て仕舞へまは云はぬから、

使用は君の勝手として預けて置く、散歩に出て来玉へ」
佐久間君は其の厚意を無にするを恐れて頂戴し、板橋君の勸に従ひ、午
前十時頃から宅を出て祝賀會見物に出懸た。

第十七 彈 (向島花見の慘事)

裕に小倉の短袴に山桐の下駄、しかも棕櫚の鼻緒に薪の如な洋杖一本、學
校記章着けた獨逸式の帽子を頭に頂だき、今日を曠と街路の植木まで花をつ
け、飾り立てた京橋、日本橋、萬世橋と、鐵道馬車も通はぬ人の群集は、正
月と盆と神田の祭と、山王祭と兩國の川開と、東京市中一年の行事を今
日一日に執行ふと云つてもさまで過言でない賑ひと、人は綺羅を盛装した中
を傍目も振らず、押し出した佐久間君、誰目にも異様な書生と見たに相違な

い、佐久間君は揉みに揉れ、押しに押れて兎も角も上野公園までやつて来た
花は今が見頃であるが、群集の砂埃りに、花の色はまるで灰色である「これ
ぢや花ごころか、人が入見て埃を吸に來たやうなものだ、健康さか衛生さか
口やかましい東京人が、この埃の中で酒、辨當、イヤジウも恐れ入つたな、
おまけに氷水を吞で居る奴がある、四月も今日は十日ぢやないか、腹痛、
下痢、赤痢、虎癩、惡死病、すべての惡病神はこんな所に迂路付いて居る、
イヤ不健康極まる、不衛生極まる、退却、恐るべし」
佐久間君は花も見ず、人も見ず、上野の山を下つて廣小路に出た、淺草行の
馬車は通ふて居るらしい、さらば吾妻橋まで乗んかなと、驪りと飛ぶ乗った
鐵道馬車

「只今お乗のお方は、切符御持参でございまするか、お出した願ひます」お

い車掌君、雷門までだ、幾らだ」「九錢いたります」「馬鹿ッ一區二錢ぢやないか」「この箱は御覽の通り特別でござります一區三錢の三區三々が九錢いたります」「なんだ特等だ、全じ鐵路とおなじ二頭の馬で、それで一錢高いのか子」「箱が奇麗でござります」「箱が奇麗たつて、こう吊革に下つて居ちや特等も並等もないぢやないか六錢にまける、君の損にはなるまいし、ねへ車掌君、それで宜らふ」「ごうか御笑談、仰有らずしてお早く願います、今日は御辛棒を願ひます、満員のことでござりますから」「満員て何人が満員だ、四十二人乗と揚示しながら六十五人から乗せて居るのは不都合だ、だから四十二を差引た二十三の頭数は薩摩守だ、その通り心得て宜らふ、あはゝゝゝ」

「賛成〜」

「そんな事に賛成されぢや困ります」佐久間君、ごこまでも車掌をからかつて居る馬車は雷門に着いた、乗車は大半此處で下車した、佐久間君も九錢拂つて下車した、イヤ是處も上野に譲らぬ群集雑沓、仲店などは群集の鮓づめになつて居る、所詮公園内に入ることが出来ない、斷念を付けて吾妻橋へ出で橋を向島へさ渡つた、此處も花は今が満開、川は船、人の波、陸は老若男女の人の山。

「おい、佐久間君ぢやないか」

背をボンと叩いた者がある、振り返つて見るさそれは五人連の學友であつた。

「おう、石橋、高崎、田中、山崎、川田の五君だな、ごうだ此の雑沓は」

「宜く来た子、君にして此の花の下に居らふさは意外であつた、兎も角も言問ひに襲撃しやう交際玉へ」

「言問て君なんだ」「例の團子さ、女は居な

いし酒はなしさ、鹿野木の君を誘ひにはお誂への園子屋サ」

「花より園子が、宜らふお供しやう」

佐久間君は五名の學友に件なはれ、言問園子に押上がり、サア食ふは食ふは五人と一人と釣り合ふまでに頬張つた。

「どうだ、此の人の數、花の數より多い子、それにあの船を見玉へ、夥多しい數ぢやないか、流石は東京だ子」 「成程、美味な、これで君一ツ幾何だ」 「一個がたしかに五厘だ、安からう」

「左様だらう、一口に三ツ、まづ一口が一錢に當る勘定だな、はゝゝゝ」 園子と茶と右と左に油斷なく忙がしい佐久間の耳に「あれ、船の轉覆ッ」云ふ悲惨の聲が鼓膜に摺半鐘の如く響いた。

「なに、船の轉覆だッ」

立ち上つた時の佐久間善次君は、もう袴の紐を解き帯の結び目に手をかけて居た「おい、佐久間君どうするんだ」 「助けに行く、見て居らるゝかい、あれゝ女子供の溺るゝ事、君達の内に水泳の心得ある者は一緒に來玉へッ云ふが早いか素ッ裸、禪の三ツを引きぬながら驅け出したかとおもふさ堤の上から大川目蒐てザンプさばかり飛び込んだ。

第十八 彈 (身を殺して仁を爲す)

船の轉覆、衝突から起つた事で二艘の屋形船と一艘の猪牙船の三艘で屋形船には新橋の藝妓、仲居、幫間、それに客と云ふ乗り人で双方共に拾四人宛も乗つて居た、最後の猪牙船には乗合客で商人もあれば學生も居る、職人も居る女小供を打ち混て、二十人から乗つて居たのであらふ。

救助船は四方から漕ぎ付けて来た。佐久間君、拔手を切つて現場に泳ぎ付き、誰彼の差別も區別もなく、手當り次第に引ッ抱へては救助に漕ぎ付けた。船に抱え込む投付け込むと云ふ早業は、誰も彼も驚いた折りから大學生の短艇や矢の如く救助に來た、團子屋に居た學友も小舟を押し出して來た。佐久間君は必死になつて助けて廻つた、水上警察の救助船がやつて來た。時は最うすつかり救助されて居た。此の目覺しい佐久間君の働きは、誰あつて見逃すべき筈はなし、これで全部助かつたと云ふので學友の小舟に打ち乗り「サア歸らふ、こんな處に長居は無用、無關係が宜しい、船出したく」「だつて警察が來た以上はすべての報告は君しなくちや不可よ」

「警察が來たから僕等の用はもう済だのぢやないか、僕は其の時、人民保護

の警察救助艇が居たならば、なにも手を出すのぢやない、見物して居るよ。しかし警察や他の救助をまつて居る場合でないから手を出したまでサ、それで警察が來くれた以上は僕等が彼是云ふに及ばぬ、兎角後が面倒だから歸らう」

「まあ待て、君、君あつてこそ、此れ丈の人命を取り止めたぢやないか君なくば少なくとも半數は死んで居るだから、其の功に對する報酬を得んでごうするか」

「馬鹿、人を助けて恩に着せる位ひなら始めから助けざるに如すだ、僕は失敬するぞ、左様なら」

身を躍らして川に再び飛び込んだ、拔手を三反ばかり、巧の水泳で兩岸の見物を驚かし渡の乗り場に泳ぎ着き「もし、言問團子はどこですか子」

「團子は向ふですが、豪いお働らきでした子、頂度二十人助けてくれました子、一同貴下の働らきに感謝して居ります、兎も角御案内致しませう」物見高

いは都人士の常の事、二十余人を救助した此の勇士を見んさて言問の前は人の山、それでなくとも満員の客座敷は、我先きと繰り込んだ客に立ちも這いもならぬ大混雑、しかも佐久間君を包圍して勇士だ、神だ、我が黨の士だ、偉い、と賛辭を浴せ掛けられ「川の中では死ぬ氣遣ひはないが、此の人波ちや溺れさうだ」と受けぬと云ふ勘定を無理に一圓紙幣を女中に抛け付けひとぞで潜つて飛び出だし、花の下さ人の肩と肩との間を摺り抜けやつと枕橋まで抜けてホッそ一息の

「やれ、これでどうやら助かつた、しかし今日位ひ疲れたことははない、所詮歩いちゃ宅までは六ヶし、矢張り淺草に出て馬車の御厄介になるさしやうか」疲れたも無理はない、二十人から水中に溺れて居る女や小供、なかに二十貫もあらふと云ふ大兵を水の中から抱へ上げて働いた跡であるから、如何に元氣旺盛の佐久間君でも金鐵ならざる生身の軀、馬車に乗つてからと云ふものは、何時の間に夢現、車掌が叫けぶ停留所の名も耳に風、宜に氣持になつて眼を覺した時は「一体此處は何處だらふ、妙な所るだな」不審ながらに車掌を捉へ「おい、君、こゝは何處だ子」「次は泉岳寺前」「えッ、芝、高輪、偉ひ所に來たものだ、一寸寝たさおもふ間に淺草から高輪まで彼れ是れ一時間以上になるな、道理で大分氣分が宜くなつた、ちや、乗り越さして引き返し、宜く寝たものだ」

泉岳寺前で下り引き返へし宅へ戻つたのは其の日も暮の頃であつた、板橋君へ今日の人の出の事やら上野、向島の雜沓は話だが二十余人を助けた事などは顔色にも出さなかつた、たゞ疲れたから今夜だけはお先きに御免蒙むりまするさ、八時頃から床に就いて其の翌朝も、九時と云ふのにまだ床を離れ

ない、尤も十一日は日曜日なので學校は休みなり、佐久間君も正体なく十時過ぎになつてやつと目を覺した。

第十九彈

(確に甘黨の旗頭)

私ながら今日は耻かし寢過たさ、井戸端へ出るなり下女の聲。

「佐久間さん、何處に居らつしやます」 「此處だよ、君、井戸端に居る、どうも大變に寢過た、きまりが悪い」 「そりや左様でせう、大變なお働きなす

つたそりですれ、旦那様のお召でございませう、直に被入しやい」 「なんだい

大變なお働きて」 「知つて居ますよ、ちやんと新聞に」 「何を言てるんだ

僕は知らない」

顔を洗つて茶の間に挨拶に行く、座敷から頼りと呼んで居るのは主人であ

つた「お早うございませう、今朝ばかりは前後も知らないでツイ夫の日曜日だと思ひまして、どうも失禮いたしました」板橋君は家人と打ち集り前に新聞を廣げ茶を啜つて居られたが。

「おう、佐久間君、君は昨日大變なお働らきだつた子お蔭で俺の名まで高くなつた」 「何にが何にやら薩張り分りませんが、あの向島の事でございませ

るか」 「左様です、ちやんと新聞に出て居る、此れ程の働らきをやつて居な

がら知らぬ顔して濟して居る所は君でないさ出来ない事さ、感心した、敬服

した功を誇らぬ所が眞の仁だ子、身を殺して仁を爲すさは君の事だ、俺は君

を勧めて出した甲斐があつたを心、竊かに喜んで居る、今朝から新聞社の記

者が五人も来た、寫眞云ふが一枚しか俺の手許にないのだから各社で持廻

りするさか云つて持つていつた、疲れたも無理ない子」

「はい、それがもう新聞に、怪からんですな、大方學友の奴等が一廉高名でもしたかのやうに警察にお饒舌したのでせう、困りましたな、それが嫌さに逃げて戻つたのです、お負けに泉岳寺まで、馬車は乗り越し車掌に笑はれました」 「は、は、は、泉岳寺前まで君逃たのか子」 「イエ、浅草雷門から乗りましたが、ツイ迂濶く寝て了い乗り越して高輪まで皆で笑ひました」 「夫りや笑つたでせう、しかし笑はれるほどの働きは出来ない事だ、どうか其の仁をなす精神で他日國家の爲め、大いに奮闘して貰ひたい、兎も角も今日は君の功名に報ゐるため、好物の善哉でも馳走しやう」 「有難存じますしかし別に私のならばまた此の次に御馳走を願ひます、あまり甘いものは遣ん方でございますから」 「だつて君、團子二十五人前を平らげた豪傑さあるぢやないか」 「は、は、は、六人でやつた事ですから或びは平らげたかも知れ

ません、するま一圓の勘定では不足でせう實は受けないま云ふ奴を叩き付けて来たのですが何うでせう」 「不足はあつても五人が拂つて居るよ心配しなくても大丈夫、不足云つて幾何もなからふ」 「左様でせうか、兎も角御飯を頂きませう」 「眞にさうだつた、君は御飯前だつた子、ぢやお汁粉は午後にしやうか子」

「さうして頂きませう」

佐久間君は朝飯を食つて居る、其處へ助けられた方は今朝の新聞で御住所から御姓名が分りましたと禮に来る、禮に来る、自分が出るま面倒だから、板橋君に縫つて應對して貰ふ見るくうちに菓子折やら洋酒箱が床の上に積み上げられた、中には本人でない、其の人の親類さか友達さか云つて禮に来る、それが素手で来る者は一人もない、皆恩人へさ手土産を提て来る、午

前十時頃からボツ／＼來出した客はもう四時、日脚も少は傾きかけて居るのにまだ絶ぬ、板橋君は煙草吸ふ間も一時はなかつた。其處へ學校の友達が三々伍々やつて來る。板橋家は門前市をなすの有様であつた、扱て其の日も暮れてやつと客も來なくなり一家打ち揃ふて食卓に就いた。

「お約束のお汁粉處でなかつた子。しかし門前市をなすの訪問も皆君に對する謝禮の客で應對する俺も今日位ひ肩身の廣かつた事はなかつた、時に澤山な御進物だが、あれは一体どう所置したものが子」「其處は一ツ然るべく所置して頂きませう腐らない分は宜ございまするが、貯藏の出來ない奴はどうでせう一々腹へ納めることにいたしましたは」「だつて君、そんな生やさしい數ぢやないぜ、何さが一ツ思案せすば成まい」

「然るべくお願い申します」

無慾淡泊、そんな物に目も呉れない、しかし其の夜の事、榮太樓の甘納豆三斤入りを擱んで食ひ、食は茶呑み、話の肴にしてペロリ平げたには板橋君始め家人一同、佐久間君の甘黨には驚いた。斯くて翌月曜日、學校へ昇校と學校では誰知らぬ者はない、校長は佐久間君を講堂に招き、全生徒を集め、その中で勇敢なる君の行動に就て表彰され、また東京府よりは褒状を送つた、新聞社は君の肖像を掲げて勇敢なる學生と題し盛んに其の救助の働き振りを、不斷の學術、品行等のことまで書き聯れ、東京三万の中學生の模範とまで賛辭を呈したものだ。佐久間君は、この評判が煩いさて、其の後五日目に退學届けを郵送し、一室に籠居して一切何人にも面會しない事にした、而して來るべき陸軍士官

候補生の試験を受ける準備に取り蒐つた、板橋君は今回の退校は些さ早計である忠告した、而して徴兵猶豫の手續してはさ勧誘した、しかし何處まで自信ある善次佐久間君は受験の手續きとして其の準備に餘念なかつた。

第二十章 意外なり博徒の襲撃

佐久間君は士官候補生の試験を受けた、其の結果は何うであつた刻苦勉勵營雪の苦學茲に空しからず、學術、体格、共に優等で及第した、此の通知を受けた其の日は板橋君も其の勞を稿らひ大いに御馳走して慰籍されたさうだ斯て其の年の十二月一日目出度く士官候補生として騎兵第一聯隊に入隊した噫、昨日までの書生さん、板橋家の食客は、今日ぞ勇まし軍服着けてしかも將來將官たるべき望みを抱いた士官候補生の肩章も如何にも勇ましく、

また頼母しくもあつた。

翌日三十二年十二月一日士官學校へ入學した、在學中の勉強は非常なもので學生の模範と唄はれた、君の得意は劍道であつた、馬術は騎兵隊入營後の終業であるが武藝に興味深き君の事なら、馬術は得意と云はるゝまでに巧みであつた、また射的も得意の中であつたが、なんぞ云つても馬上の劍道にかけては聯隊に於いても及ぶ者はなかつた、また騎兵科の同期生にも、教官も君に打ち勝つものはなく、在學中に擊劍だけは教官の位置に据つて、父譲りの一刀流の劍道を愈々發揮して其の非凡の腕前を現はした、これに就いて面白い話が一つある。

夫れは入學した翌三十三年の夏であつた士官學校全部羽田の海水浴に水泳練習として一週間全地に滞在、中の出來事で何かの事から佐久間君の同期生

が土地の遊び人と衝突した、遊び人と云へば其の土地の博徒で此の羽田附近で親方さか、親分さか立られて不敵大きな顔して遊んで居る破戸漢の星田勘三郎と云ふ男があつた、此の勘三の乾分の仇名を房州へ云はれて居た奴があつた、まことに酒癖の悪い男で呑みさへするさ、子供や女、老人でも何でも構はない、無理難題を吹き掛けて亂暴狼籍いからざるなしで手も着けられた奴ぢやなかつた、佐久間君の同期生が此の房州に喧嘩を買れ、大人く下から出るさ付け上り、悪口雑言ばかりならまだ宜いが、軍隊を罵倒し、將校や將官の事まで夫れ／＼名を擧て罵詈する雑言に、此奴在郷軍人に相違なからふ、でなくばあまりに軍隊の事情に通じ過て居るさおもたから用捨はしない、此方は三人連なり、飛び蒐つて房州を捻じ倒し、拳の雨を降して亂打して引き揚げた房州は半死半生で逃げ戻り、かくて親分勘三に訴たへたか

耐らない。

「なに、相手が軍人であらふさ大臣であらふさ什麼こそ恐怖がる俺ぢやれへなんだ士官學校だ、將校になる奴等だ、宜いぢやれへか相手が一兵卒でれへだけ面白いや誰彼はれへ、これから羽田の濱邊へ乗り出し、何奴此奴の用捨なく、出合た奴なら手前の仇敵、叩き伸してやらふぢやれへか熊も八も金太も来い、宜いか皆柄物の用意が入用で、まかり違へば相手が多勢なんだから合口の用意もせい、奴等の劔は研でれへから斬れる氣遣ひはれへがな突かれれへ用心せい、支度が宜くば皆な来い、しかし太袈裟に乗り込んぢや先方へ曉られるからな、二人、三人と少しづつ、間を置いて来るやうに、宜いな、曉られたら憲兵だ巡查のさ煩せえからな、靜かに乗り出すぜ、分つたな」
「分りました、合點です」

「ぢや、徐々乗り出せ」

さ勘三を初め喧嘩なら、飯より好な博徒の奴等、拾四五人が二人、三人と別々に羽田の濱近くに、押し出した其處へ折り悪く通り蒐つたのが佐間君であつた、無論佐久間君にも一人の同伴者があつた。

「二寸お待なせえ」と迂路くして居た怪しの若い一人が立ち塞がつた、見ると櫻木の握り太の洋杖を携て居るさ、夫れが仕込杖のやうであつた。佐久間君は立停つて何氣なう。

「僕ですか、なにか用でも」「用がありやこそ待つて貰つた、なんだからお前様達は此の羽田に来て居る士官學校か士官候補生さか云ふ軍人さん達だ子」「如何にも左様、候補生に相違ないが、それを聞いて何にする、用でもあるのか」賣り言葉に買ひ言葉、相手の出様が出様だから佐久間君も憤さし

た「何するも無へ禮を云ふのだ」「僕はお前さんに禮を受ける覺へはないが」「お前さんには無からふが此方にやアあるんだ、皆来い〜二人だけさつ捕まつたから疊んで了へッ」

「おつさ合點だ、遣ッ付ける」

一人とおもえば三人五人、周圍に立つて見た奴共、何でも向ふの味方であつて、我を待ち伏せ襲撃の喧嘩買ひらしい、佐久間君は譯は知らぬが、油斷なく身を構へ理不盡な奴等、仔細に依ては容赦はないさ早や決心の臍を固めた

第二十一彈

(所屬聯隊の誇である)

三人五人拾人き駆け集まつた博徒の數は十五人、なんの意恨あつての襲撃が我に恨みを受ける覺へなし、何かの間違ひか夫れさも人違ひか、仔細さんさ

わが分らぬ佐久間君。

「さて、僕は逃げ隠れするやうな勇でない、これには何か仔細のあらふ、恨みを受ける覺へはないだ、間違ひか夫れさも人違ひか、僕は佐久間善次と云ふ者ちや、また伴れば僕の友達だが、そんな人に意恨を含むさか、また喧嘩口論するやうな者ぢやないが、どう云ふ譯が聞かして貰ひたい、其の上受ければならぬ恨みがあらふば、男の意地ぢや、随分と相手にならふ」
「譯も糸瓜も生命があつたら隊に戻つて聞か可い、手前一人や二人ぢやねへ、此の羽田に來てる奴は皆な相手だ、それ、物も云はすな疊で仕舞ッ」

「おツと合點だ」

突如正面から打ち込んで來る奴を体を開いて直に付け入り手刀の一撃、持つたる櫻杖を取り落し、拾ひに來るを突き飛し、杖を奪つて大音聲。

「此處は僕が引き受けた、宿舎の風紀衛兵へ君は通知して呉れ玉へ、十や二十は瞬間に叩き倒すが、無名の喧嘩とおらはれんが心外だから大急ぎで通知して呉れ玉へッ」
伴の學友だけを逃がしておいて「サア來い、鬼佐久間は僕の事だぞ、それ承知で蒐つて來い」
「なにを小癪なッ」
さ多勢を力に前後左右から打ち込む奴を右に拂ひ左に打ち込み、當るを幸はひに叩き伏せ見るく内に五六人、口程にもなく將某倒しに撲り倒された。

斯く見るより親分の勘三郎、味方の不利と捨鉢に抜いた合口、又渡五寸の業物を逆手にさつて閃めかし。

「野郎共、手前達の手に叶ふ奴ぢやねへ俺に任せて見物せい」
「だつて親分お一人ぢや危険へく」
「なアに大丈夫さ、俺にまかせて見て居るが宜い、退けく」
「宜う御座んすか子」
「大丈夫て事よ、心配するな」
親分勘三は

猛然と奮い起ち、薩摩薩兒を無理に退して進み出で、見ると冷々する白刃を
 閃めかし「青二才さおもへば味な腕前、惜い男と思ふが男の意地づく、可愛
 さうなが殺してやるから覺悟せい」佐久間君は莞爾と打ち笑み、虫全然の貴
 様等に生命を渡す僕でない、苟くも國家の干城をもつて任する我輩が五体は
 鐵石、斬れるものなら突くなさ斬なさ蒐つて來い、此の洋杖は刀も全然、五
 体に觸たら粉骨碎身、サア來い受けて見るのか親分と聞く以上は絶対に許
 さぬから覺悟せい」「なに猪牙才なツ、後悔するなツ」
 無二無三に突き込んで來る奴を、得たり轉した飛鳥の早業、空を突かせてダ
 ヅくく前に蹣跚く奴を佐久間君、勘三の小手を例の櫻の杖で「鋭ツ」こ
 一撃、勘三は手先き麻痺して刃物をガラリ、取り落して南無三寶、失策つたこ
 飛び退く奴を、背後から右の肩にまた一撃、無慘にも勘三は其の場にバツタ

倒れて「ウムツ」さもろきは人の生命さか、其のまゝ氣絶して仕舞た。
 大將撃れて殘兵全たからず、こりや叶はぬ臆病風に吹き捲られ、殘餘
 の奴等は皆散々、其處へ急報に接して駐在、巡査、憲兵、兩名駈け付けた。
 佐久間君は氣絶して居る勘三を引き起し活を入れて蘇生させ、巡生に引き渡
 して自分は憲兵に所屬軍籍、姓名を名乗つて此處に到る顛末を物語り
 「なにか知らんが無法な喧嘩を仕掛られ、此方は正當な防禦をやつたまで
 ある、此の洋杖も此方の乾兒さか云ふ奴のものであるが、能く調べて呉れ玉
 へ此れには何ぞ仔細があるらしい」
 佐久間君は何處までも沈着たものであつた、巡査は勘三郎に向つて喧嘩の
 次第を問ひたつた、此の場合に望み言を左右にする程卑怯の勘三郎でも
 なかつた。

彼は乾兒の房州と云ふ奴が、士官學校の生徒に牛死牛生の目に遭され、命からく逃げ房つた事、其の相手の誰やら判明ぬ處から士官學校の生徒なら誰彼なしに喧嘩吹き掛け、乾兒の仇を討つ考へであつた事まで自白して「實に驚ろきました私くしも此の年まで、喧嘩で不覺をさつたもなく人にお詫として頭を下たり恐れ入つたさ云ふことは、一度だつてございせんが、此の方のお腕前には實際驚ろきました、中途で後悔いたしました引くに退れず乾兒の奴等に怪我させまいと、私くし一人て相手になりました、尤も最初から叶はぬ腕さは承知でば蒐りましたが、正可期くまでさばおもひませんでした、御處分は如何様もお受け致します、私くしが悪いのですから御處刑に付きましては不服は決して申しません何卒かお繩をお掛け下さい」

と博徒ながらも流石は男、親分と立てられて居るだけあつて、少しも悪びれ

た色もないが、たゞ前非を後悔した色は自然顔に出て笑止であつた。勘三郎は今警官に引き立られて行く時まで佐久間君におのが不明を謝罪した、元來仁義に厚き佐久間君、悪意は悪意に相違はないが假にも人の頭と立つて親分と尊敬されて居る勘三郎が前非を悔た謝罪の言葉を其のまゝ聞き流しに拘引されるを忍びなかつた、其處で巡査に向つて一應説諭の上放還されたし、こんな男の事だから、また物の用にも立つ可き折もあらふからさ、呉れなくも頼んで憲兵に伴なれば宿舎に引き揚げた。勘三郎は其の翌日放免になつたさ禮に來た、しかも士官學校教官へ面會を願ひ出で深く其の罪を謝して引き取つた。

此の事あつて以來、佐久間善次の名は再び羽田の海水浴場から東京に傳はつてまた新聞の記事となり所屬聯隊では佐久間あるを誇りさした位ひであ

つた。

第二十二彈

(猛と勇との大衝突)

佐久間君は其の年の十一月士官學業を卒業した、しかも優等であつた事は云ふまでもなく見習士官として所屬聯隊に復職した。騎兵第一聯隊では此の名譽ある見習士官を迎へて其の所屬中隊の如きは誇りにもしたまた意張もした。

此の名譽ある見習士官佐久間善次君は其の翌年の六月騎兵少尉に任ぜられ全日騎兵第十六聯隊附に補せられた。

騎兵第十六聯隊は東京所在第一師團所屬で名譽の歴史ある聯隊である名譽ある若き士官を迎へた、何づれにしても花を咲す時節があらふ、花々しき

働らきを見せる時期があらふとおもふ。

全年十一月正八位に叙せられた。

扱て其の年を無事に送つて茲に三十七年の春を迎へた、日露の國交は斷絶して隣國支那の遼東の野に世界の最大強國露西亞を相手に兵火を交える國難は突發した。

春は名のみまだ梅の花さく綻るびぬ如月八日、我が艦隊は朝鮮仁川港外で、露國艦隊と砲火を交へ、其の二艦を撃沈し、大々的勝利を得て全港を占領したしかし其の日に露國に對する宣戰の詔勅の喚發を拜した。

我が海軍は全艦隊を擧げて旅順口港外に活躍し、陸軍、しかも第一軍は朝鮮に上陸し、其の國境の大敵を驅逐せんと遠く北進した、平壤以北に於いて、斥候其の他の小衝突は幾度が演れたが、我れは此れを撃て威風堂々旭日

の旗を寒風に翻がへして北進し、いよ／＼鴨綠江に於て露の大軍と對陣となつた、而して一擧九連城を撃碎して滿州の野に北進する事となつた、此れを全時に我が第二軍は編成された。

第二軍は第一師團、第三師團、第四師團の三ヶ師團をもつて一軍團として出征した佐久間君は第二軍に屬して金州、南山を占領し、遼陽と旅順の露軍此の二大軍の連絡を絶つて、而して遼陽の露軍に向ふべく遼東半島鹽大塊に上陸した。

鹽大塊は金州灣と大連の畧中央頃の地點であつた、第三師團、第一師團、第四師團の順序で上陸し、先發の第三師團の一部は直に船中の疲勞れも休養せず、地の利をまつて高地を占領したい。

いよ／＼上陸を了つた我第二軍は、先づ手近な十三里臺、普蘭店、皮子窩の

敵を撃退し、進んで金州城を陥落せし、息をも吐かず其の足で南山を撃碎した上陸したのが五月五日で金州、南山の二大堅城を奪取したのが全月の廿五日此の間僅かに二十日疾風、迅雷的の活動には流石の露軍も其の應接に目を廻し戦畧家と云はれたケロバトキン將軍も泡を食つて仕舞た。

戦へば勝ち攻れば取る我が陸海軍の連戦連勝は、如何なる場合に望んでも、常に攻勢を採つて始終一貫變更こそのない精神が勝つて戦へば勝つ攻れば取る、で器械の働きて勝のぢやない、敵の進歩せる兵器と我軍の兵器とは比較にならぬ、我は器械で戦争するのぢやない、日本魂と云ふ愛國の精神で

戦ふ、此の愛國の精神はやがて内彈である、肉彈をもつて敵の實彈に衝突つて戦ふ、それで強い、一ヶ所に城を築いて守勢をまつて動かぬと云ふやうな、什麼悠長な戦争は斷じてしない、敵が一步退却すれば十歩進む方針で、

敵が十歩退却せば我は追撃の急をもつて敵に當るのである、露軍如何に強兵をもつて世界に誇るも九連城は奪取れた鳳凰城は陥落した金州、南山は敗れた、得利寺も駄目、大石橋も持ち切れず、北へくゞ退却する、しかし流石に恥を知る露軍は黒溝臺でウンと踏みこたえた、角力ならば此處土俵際、此處で土俵を割て仕舞ば、遼陽、沙河、奉天で踏み止るこゝが出来るか出来ないかそれは今の露軍では疑問であつた。

されば此の黒溝臺でウンと踏張り、遼陽の防禦の完全を急がねばならぬ、それまでは是が非でも此處で日本軍を喰ひ止めねばならぬと露軍も懸命であつた我が軍にして見るさ、遼陽の防禦も完全しない間に、黒溝臺を落さればならぬ、一日おくれては夫れだけの損害であるだから攻撃が猛烈である、露軍では此處を大事に守るから此れまた猛烈である、猛烈な露の守勢と猛烈な我

軍の攻勢の衝突だから耐まらない、茲に豫期以上の大戦は開かれた。

此の大戦に於ける佐久間少尉の勳功は大したものであつた尤もも騎兵のこゝだから眞先懸けの斥候の大役を勤ればならぬ佐久間少尉は一小隊を率ゐて黒溝臺附近の敵軍の動靜を搜りに主力を離れて進發した、道なき道を馬で進むのだから甚はだ困難である、本隊と別れて陣地を出發たのが午前七時であつた、一枚の地圖をたよりに敵地深く乗り入つて、動靜を搜るのだから容易の業ぢやない、元來此の斥候さ云ふ役は細心にして膽力ある人でない責任を完全ふする事は出来ない、而して敵の目を避けるやうに戦争も避けねばならぬ、それも威方でやる強行偵察ならば衝突次第、敵を撃退して尙も敵地に乗り込み、何處の方面には砲が幾門、機關銃隊を何れ丈けさか歩騎の数はどれだけ位ひさ、無理押に調べて来るか、全じ將校斥候でも一小隊位

ひの数では其れは出来ない、可成的く戦鬪は避けねばならぬ、而して敵の動靜を捜ぐらねばならぬ、自分の姿は見せないで、敵の姿を見届けねばならぬから、餘程剛膽で、また用意周到、細心な人でないか駄目である。

騎兵聯隊では兎も角も此の重任を任了せるものは佐久間少尉であらふと、特に選ばれた斥候なので、佐久間少尉の名譽ばかりが其の部下となつた士卒も名譽至極である、延ては所屬聯隊の名譽である。

佐久間少尉は三里五里と進んだが、どうしたものか地圖をたよつて来たものが目的の地に達するこゝが出来ない。

佐久間少尉は時計を出して見て驚いた、もう十二時少し過ぎて居る「時間は何争そはれない、お天氣が曇つて日時計ぢや分らぬが、腹の工合がもうも正午らしいと思ふた、兎も角も此處で晝食して人馬に多少の給養を與へずばなる

まい」森の小影で前には小さな川も流れて居るし、人馬の休養には洩らへ向きである、其處で晝食とあつて一時間の休息となつた。

馬には水を與へ秣を食はせ、人は晝食、それも竹の皮の握り飯、梅干二ツに鹽ツからひ澤庵二切、その握り飯が内地で食ふ山海の珍味も及ばぬ位ひの美味である。

佐久間少尉は握り飯を左手に握み、一口頬張つては右手に地圖を繰り擴げ、「どうも不思議でならぬ、こうして見るさ来た道もまた目的地點も相違なさそうに思はるゝが、期様方針を探つて見るさ丸切り方角が違つて居るやうださ頻りに研究して居られたが分らない、其處で伍長の中田某さ云ふ者を呼んで「おい中田伍長、鳥渡此處へ来て呉れ」「はい」

と答えてやつて来たのは少尉が此の男こそ、不斷は女の如に優しいが、イザ

さなつたら大膽で物の用に立つ男である。機会があつたら一度試して見たいさは、かれて思ひ込んで居た云は、見込を付けておいた伍長であつた、佐久間少尉は差招きの。

「もう飯は済んだのか子」「只今済ました」「それでは甚だ氣の毒だが子、どうも此の地圖が不安でならぬ、今に目的地に出ない處を見るさ踏を踏み迷ふたのぢやないかさ其處で休養時間に氣の毒だが、此の丘の上まで登つたら一寸した眺望は出来であらふさおもふ、御苦勞だから展望だけで方角を定めて来て貰ひたい、三人なり五人なり一緒に登るのは宜いが、それは甚だ危険であらふさおもふ、だからお前一人でやつて来て呉れまいか、これは貴様を見込んでの頼みぢや、分つたな」

「はい、分りました、しかし少尉どの、頼みぢやさ仰在るさ張合がございません、矢張り命令にして頂かんぞ」
不斷は大きな聲もしない中田伍長が、決死の色を眉宇に閃めかす頼みでは張合がないそれに情に流れた言葉であるから命令にしてほしいと直立不動の姿勢をとつた「ウム、命令ッ」さ少尉も立ち上つて勇ましく「丘上より展望し、目的地の方面を見て報告せい、終り」「はい」廻れ右した中田伍長は、單身劔を杖いて徒歩で丘へと駆け登つた。

第二十三彈

(日本刀の斬れ味は)

中田伍長の歸隊報告に依るさ、更に展望は利かすた、此の丘の背面に當つて戸數二十あまりの一村落がある、村落には支那人が安閑として住居する、それから考へても敵の陣地方角さは懸け離れた方角違ひではあるまいか村落

までは此れを右に迂徊して約二十町、丘を背面に下れば頂上からは眼下である、しかし下るべき道なし、迂徊するの外なしと云ふ事である。

佐久間少尉は仔細の報告に感じ入り、伍長に休養を與へて懇切に勇めをつけながら「御苦勞だつた、それで分つた、確に道を迷ふたに相違ない、さすれば此の地圖から當にならぬ事になつたが、萬一地圖に相違の點のあつたら夫れこそ容易ならぬ事である兎も角もその村まで乗り出さう、而して道案内を雇ひ入れることにしやうと、此處で馬上の人となり中田伍長が先きに進んで案内する、成程二十余町の處に一寒村に到着た、今此の村へ入り込むが早いか、敵の斥候らしいが横手の森から現れた、しかも一中隊ばかりで我よりは遙かに優勢である、お負にこれに露國自慢のコザツク騎兵だから面白い、普通ならば、敵よりも此方が先に見付たからは戦鬪を避けて退却せ

ればならぬが、道は迷ふたし、意の如くに任務を盡し得めさむしやくしや腹の佐久間少尉は、すぐに戦鬪の命令を下した敵を撃退せんと覺悟したのである此方は馬より飛び下り、人家を小楯にさつて姿を隠し、何にも御存知ない露助に向つて狙ひ討ち、距離は百米突あるかなしごんな下手な鐵砲でも、狙ひ外す氣遣ひなし、だから面白い、ボンと打てば敵の一騎がズドンと落馬する二發放せば二騎轉がるさ云ふ射撃なら、驚いたのは敵の騎兵と村に住居る支那人で、正可こんな所からボンと打ちはずまい、戦争はあるまいと安心して居る眼の前に、ボンと打てば、敵も狼狽ながらに打ち出したしかし我は姿を隠して居るから、敵は見當が付かない、見る／＼うちに二十騎あまりの死傷者が出来た、こうなるさ臆病風か得て吹くもので、敵の多寡を考へる間もなく、退却／＼でドン／＼逃げ出した、我に一人

の損害なく逃る敵騎を側面から、一齋射撃かとおもふばかりにバラ／＼打ち出した、時分はよしと佐久間少尉は、すぐに馬乗を命じて追撃戦に移つた、しかも少尉は日本刀を振り翳して陣頭に駆け出でた、敵も去るもの、初めは多数の日本軍に衝突したとおもひ込み、退却したのであるが、見るに存外少数であるしかも騎兵と見たから踏止まつた、此れが少数にせよ、歩兵と見たら逃げるのであらふがコザツク騎兵は、おのが優勢なのと今一ツは歩兵には散々痛み付けられ、實際日本の歩兵は強い、野戦にかけては絶体的叶はぬが、憚りながら騎兵などは恐るゝ事は微塵もない、日本の騎兵は駄目だ、と彼奴等は最初から日本騎兵を軽く見て居るのであつたされば騎兵の一少隊位なら、こんなに泡を食つて逃るぢやなかつた馬蹄に掛けて踏み殺せよと其處になるよ世界一と唄るゝコザツク騎兵、馬の轡を押し並べ我に向つて逆襲

襲と来た。如何なる場合に臨んでも、我は何處までも攻勢である、佐久間少尉は面白し逆襲とは物々しき敵の振舞かな、イデヤ日本刀の切味見せんサア来い来たれッ、近寄る敵騎の中に切り込んで、當るにまかせて斬き落した、それ少尉殿を討たすなと、小勢ながらも必死の突撃、入れ亂れた自兵戦、我にも四五の負傷に二三の死者を出したが敵はまたもや二十余の死傷者が出来た、殊に佐久間少尉の腕前に恐れ入り、多勢をたのむコザツクも、やはり命は惜いさ見えて、死傷者も打ち捨て、退却して了つた。佐久間少尉も二ヶ所の疵を受けたが大した事もなく味方の死傷者の手當を部下に命じて自分は中田伍長と敵の死傷者を検分したするに討死の中に敵の少隊長があつた、佐久間少尉は死骸を指し「おい中田伍長、この死骸は少隊長

らしい一ツポケットを調べてくれんか、大方地圖を持つて居るだらふとおもふ、それに手帖があるだらふ、分捕つて了へ」中田伍長は委細心得、戦死せる一士官のポケットから鞆を調べて居たが「少尉殿、地圖、地圖、地圖がありました」と叫んだ「なに、地圖があつた」「はい手帖もつて居りました」「左様が、有難い、もうなんにもいらぬ、すぐに退却、これさへあれば何にも入らぬぞ」戦死者も負傷者も馬に乗せて戦友が手綱を捉つて敵の來ぬ間に急げ、五里あまりの道を本隊近く退却した。

第二十四彈

(凱旋土産軍國の花)

此處まで來ればもう大丈夫、しかし敵も意外であつたであらふが此方も意外であつた、兎も角も負傷者だけを後送して、分捕地圖を参考に今一度敵地に

の乗り込むことにしやうと、其處は大膽不敵の佐久間少尉で件の地圖を開いて見ると、もう斥候もなんにも不用ぬ、敵の要塞から豫備堡から塹壕、地雷の布設、野砲、山砲、機關銃、歩騎砲工の陣地から鐵網條まで色鉛筆で記入してある「おい中田伍長」「ハイ」「もう此れで澤山ぢや此の地圖以上に捜るさ云ふことは出来ない、充分ぢや、そこで貴様はこの地圖を本隊、さうだ聯隊長殿へお手渡しするのぢや、それさ此の手帖はすぐに司令部に御廻し願ひますと申すのぢや」

中田伍長は地圖と手帖を少尉から受取つて本隊として竊進ら、此の地圖を得たばかりで我が第一師團の策戦がガラリと變替つた尤さも全軍の作戦、イヤ戦畧まで幾分か變つて來た、殊に砲兵陣地を知ることの出來たのは日本軍のためにどれだけ利益を與えたかイザ攻撃さなつた曉つきは、流石の露軍も

何れの方面からも側面から攻め立てられ、大きに狼狽した、一度狼狽した軍隊は最早九分の敗色を現はしたもので、残る一分の決戦は絶対に不可能な話、それでも午前六時から開戦し、午後四時までには退却しなかつた、しかも其の夜の一時過ぎ、夜襲に來た、尤も一撃の下に撃壊はしたがそれでも一旦敵に渡した要塞も、奪い返さうと逆襲して來た處は、なんぞ云つても露國は強い露軍ならでは出來ないことである。

お話しはあまりに進み過ぎたが、元へ戻つて今中田伍長が本隊として驅け戻つた其の跡は例の負け嫌ひの佐久間少尉あの地圖一枚で勝利は我軍の掌裡にあり、急いで歸隊する必要もなし、今少し引き返し、敵の動靜を見たい者だ、今度は道を轉じて進發した、處が道なら三十町も駈けたかとおもふ前面に砂埃りが空に立ち昇つて居るを者た、さては敵騎の襲來に相違ない、あの徴候

をもつて案ずるに、少なくとも二百より少ないことはあるまい、此奴は油斷のならぬ大敵に衝突したと流石の少尉も馬足を止め、兩眼鏡をさつて遙かの前方を見て居る、敵はゴザツク騎兵の大部隊、我を包圍せん計畫らしい、なるほどが、鬼佐久間「は、は、は、先刻の復讐戦の心算でやつて來たに相違ない、其處で時間から考へて見る、此處は敵地も敵地、全く敵の防禦線を突破して居るに相違なからふ、さすれば前後左右に敵を受けて居る、中田伍長さへ旨く此の包圍を脱し、本隊に歸る事が出來たら我は任務だけは充分に盡して居る、さすれば最う此處で死でも決して犬死ではない、部下を殺すは情に於て忍びない、が、これも場合が場合なら致方がない、たゞ戦ふて運強ければ歸隊する、左なくば馬諸共に此處を我等の死場所として花々しく決戦せんのみ」

部下にもたゞ死あるのみと戦闘の令を下して敵の寄せを待つて居る。敵も容易に進まない。たゞ小銃をポン／＼やつて居る。此處も此れに應戦し、三百米突の間で戦かふた。幸ひにして味方に死傷もなく元氣旺盛、今にも銃を背にし劔を騎して突撃しやうとする少尉は此れを制して「衆寡敵せず、此處は逸る所でない、たゞ敵の寄せをまつての突撃ぢや、まて／＼時機が来る、それまでは動くなく」實戦にはあまり経験のない佐久間少尉も、流石に上陸以來數度の戦闘に参加して來ただけあつて、少しも狼狽ない、ごこまでも沈着して而して大膽であつた。

時々刻々と敵は猛射を我に濺いだ、それでも少尉は動かなかつた、今に耐り兼ねへ一小隊ばかりで、我を小敵を見て突撃に來るに相違ない、其奴を撃て威力を示さん、而して我も見事に戦死せん覺悟であつた。

戦場に立つ以上、誰だつて決死の覺悟であることは、分り切つた話であるが、味方の多數な戦闘さ、我れ小にして敵なる時、しかも目にあまる大軍に包圍され、死に物狂ひの決死さは、全じ決死でも譯が違ふ。

今や敵の十騎あまりが我を目蒐て殺到せん突撃の勇を揮つてやつて來た、此方は元來より待構へた所なり、得たり賢しな號令一下、佐久間少尉は例に依つて日本刀を振り騎し、突撃／＼、馬蹄にかけて揉み潰せツと馬首を並べて迎へ討ち、奮戦突撃、敵の十騎を殲殺した、しかも我れに一人の負傷を出したばかりであつた。

此の勇猛なる奮闘に、さしもの露兵も鳴りを靜めて全隊を退却し、本隊に歸るべき道を自然と開いて呉れた、少尉は部下を率ゐて悠々と本隊に引き揚げて報告した、我が司令部に於いては、敵の地圖と斥候の報告とを綜合して

愈々黒溝臺總攻撃を開始した。

露國強兵をもつて誇るも我が軍の敵にあらず、遂に半永久的の防禦工事に油斷しなかつた黒溝臺も僅か一日にして明け渡し、遠く遼陽方面に退却した、此の戦闘に於る佐久間君の勳功は莫大なものであつた、而して騎兵第二旅團に於いては佐久間の頭に鬼の一字を加へて鬼佐久間と呼ぶやうになつたそれから遼陽、沙河、奉天の大會戦に参加して、拔群の功を顯はし中尉に任ぜられ、日露戦争も茲に幕を閉て平和克復の目出度さは、鬼佐久間少尉は中尉で無事に凱旋した、此の戦ひの功により、功五級金鵄勳章并に勳六等に叙せられ旭日章を賜はり從七位に叙せられた。中尉凱旋の日知己友人は新橋驛に歓迎し中にも勇ましい歓迎は土木建築請負業星田組の一百余名、揃ひの絆天姿であつた、此の星田組こそ鬼中尉

が士官學校在學中彼の羽田の濱近くで喧嘩の相手、星田勘三郎である、彼は善心に立ち返るご全時に建築請負業の人となり、今では星田組と云へば仲間て多少口も利く棟梁であつた。

勘三郎は中尉の握手に其の無事な姿を見て嬉し泣きに群集にまで貰ひ泣きさせたのである、性は善なり勘三郎も佐久間善次と云ふ豪傑の知己を得て、始めて人の踏みべき道を覺り得たのである、それも佐久間君に夫れだけの徳望があつたからの事で凱旋土産として此の美談はまた新聞に雑誌に軍國の花と記載されたのであつた。

第二十五彈

(日本武士の好典型)

明治四十年六月騎兵第十五聯隊附に補せらる、四十三年二月正七位に叙せ

られ、四十五年一月大尉に任ぜられ久留米師團に轉補された、而して中隊長を拜命した。

此處で一寸お話しせねばならぬ事がある、其れは佐久間君を實子の如く可愛がつてくれた人がある、東京向島水戸公爵家の家扶手塚任氏である、手塚氏は佐久間君の今日あるを聞き語つて曰く。

「佐久間氏は佐久間善太郎の子で母は三谷と云ふ家から来た、善次は幼少の頃から家が貧しかつた、それ故非常の苦學をした、先づ歩兵中尉板橋直虎方の食客となり成城學校騎兵實施學校に學んで大尉となつたのであるが小學、中學時代は水戸育英會の貸費生で、板橋中尉方の食客の當時は水汲み薪割、何一ツしないと云ふものはなく其の忍耐力の強いのは郷黨も皆舌を卷てゐた、又老少に對しては頗る親心で一旦恩になつた人

には飽までも報恩の念を忘れず盡さればおかの人であつた云々」

報恩と云ふ事に就いて一ツの美談がある、日露戦役にも無事に凱旋する程武運日出度く殊に功五級金鷄勳章を賜り旭日章を胸間に飾る軍功に、今一ツ花を付けさせたいとは、手塚氏の思案であつた、それは云ふまでもなく妻帯の事であつた、或る日の事、佐久間中尉は水戸家の門を潜つて手塚氏を訪づれた、我が子の如に可愛がつて居る中尉の訪門に何はさておき玄關に自身に迎へ。

「おう、善次さんが、久り振りだつたな、今日日はお休みかほ、成程、日曜だつた、サアお上りよ、今日は久し振りだから貴下の好物饅でも馳走しやうぢやないか」「眞に御無沙汰いたしました、一度お尋ね申したいとは始終おもふて居るのですが頂度檢閲から細密檢査なり、引き続き行軍で殆んど

で勝ちでございましてので、心ならずも御無沙汰申上げました。ごな様にもお
變りもございせんか」
何處如何なる場所でも眞面目で几帳面な佐久間君、あくまでも叮嚀である。
「はい、もう貴下の四角四面には恐れ入る迂闊り冗談も云へない、まア喜
んで下さい皆健康でいつもお手紙やお葉書で、貴下の無事を喜んで居ます
のちや、時に今日は一ツ話しておかればならぬ事がある、外でもないがな、
最う貴下も妻帯せねばなるまい、軍人は何時國家のお爲めに生命を捧ねばな
らぬか分らぬ。討死するは軍人の本分ぢやが、家名を絶すやうでは御先祖に
不孝ぢや、兄さんばりるだらふが、兄さんは兄さん、貴下は貴下ぢや、もう
妻帯して宜らふとおもふ、私に任せてもらひたい、決して貴下の氣に入らぬ
やうな女はお世話しないから宜からふ」手塚さんは頻りに中尉に妻帯を勧め

た、佐久間君は其の厚意を謝しながら。
「御親切有り難ふ存じます、しかし妻帯はまだ早い事はございせんか」
「早い事はない寧ろ遅い位ひだ」一年から申すのではございせん、私ども
は早いのでございませう」「イヤ早いことはありません、申尉と云つての間
に大尉ぢや、もう妻帯せんでは何時までも書生らしい下宿屋住居では駄目ぢ
や、下宿屋住居で居る間は、どうしても氣が若くて書生らしく、交際するに
してからが年長者よりは若い者と交ることになる、而して家庭を作るさ云ふ
ことが憶怯で面倒で邪冤臭い感じが起り安くて不可、そればかりが人間が自
然周囲の状態に感化され、情が薄らいで荒つぼくなるものぢや、なアに俺は
獨身ぢや妻子はなし繫累はなし、どうでもなれさ云ふ氣が起らぬにも限らん
其處は一家の主人となり、暖き家庭を作つて御覽、まるで人間が生れ代つた

やうになるもので、また兄さんだつて安心するだらふし、世話になつた板橋さんだつてごんなにお喜びかも知れぬ、だから私は貴下に妻帯をお勧め申しますのぢや」

手塚さんは熱心であつた、佐久間君も此の説に反對ではない、イヤ反對どころか、手塚さんの厚意を心から感謝し「有り難ふ存じます、たゞ私として妻帯が早いと申しましたのは實は譯を申し上げればお分りがございませう」「成程譯がある、して其の譯は」「お恥かしい次第ではございませうが、私にはまだ學費の負債がございませう、此の負債を皆済致しまするまでは、私は家庭を作るの、イヤ妻を娶るのなんて、什麼ことは出来ないのでありませう、だから切角の御厚意に對して心外ながら、まだ早い、イヤ私としてはまだ早いと申しました、妻帯しない譯は此れでございませう」

然れども手塚さんは委細構はず熱心に勧められたが什麼しても納得しなかつた、而して此の負債を全部返納して了つたは去年の春であつた、斯くも通知を受けた手塚氏は今度こそ妻帯せねばならぬ、家庭を作らせねばならぬ、それさなく知己友人間の令嬢を物色中であつた、此の事に就いて手塚さんの話には「私も善次が中尉時代に、餘程妻帯せよと勧めました、善次は學費の借財を皆済するまでは斷して娶りませぬと主張して却々應じなかつた」云々、此の學費の返済に就いてまた報恩に就いて美談がある。

佐久間君が成城學校在學中、學費から衣食住まで世話になつた板橋家である、全家は其後家計が困難となり見るも聞も悲惨であつた、朝夕出入する善次君は日露戦争凱旋の後、今、回出征するまで長い月日をおのが俸給の幾干かを割て全家々計の補充に送つて居た、而して善次君は報恩の誠を盡し

たのである、言ふは安し、行ふは難しその難きをなして人の人たる道を全ふした我佐久間君の如きは當代得難き人物と云つても過言ぢやあるまいとおもふ。

第二十六彈

(出征に臨んで甥に遺訓す)

佐久間大尉には眼に入つても痛くないと云ふ一人の甥があつた、名は小林活三と云つて當年僅かに二十一才、目下重砲兵第五聯隊附士官候補生で將來有望なる若者である、活三氏は大尉の姉ッ子の次男である、大尉はおのが借金(學資)の返済する傍らに活三氏の學資を貢がれた、而して活三氏のためには自己の貧乏が苦にならぬ程愛せられたものだ。當年三十八才の大尉が、妻帯もせず、家庭も作らず貧乏に甘んじ、乾燥無味

の下宿住居に一生を送つたも、全く學資の返済も、活三氏の學資に其の三分の二以上を減れた爲めである。

茲に日獨國交は斷絶し、いよいよ山東に出征と動員の命に接して、大尉は心ひそかに決心し、一身を君國に捧げ奉つる覺悟であつた、頂度其の支度の最中にも云ふべき八月八日であつた突然活三氏が訪づれて來た。

「伯父さんお變りもございませんか」「おう活三さんか、お前どうして來た」「はい、病氣で休暇を頂きましたので、お尋ねにまゐりました、何うやら動員になりますやうな話も聞きました、最うお支度が出來ました様でございませぬ」「は、は、は、其れがどうして分る、活三氏は床の上の行李の上に新調の軍服から軍帽、殊に鞘は黒の革で包みし軍刀を指しながら。

「すべてのお支度で承知いたしました」大尉は莞爾と打ち笑ひ「は、は、は、何

様俺の軍帽軍服が新調されたからか、如何にも出征の用意に相違ない、先づ此れを見て呉れ、自慢の業物ちや中身の鑑定は出来まいが、細身ながらも不動國行だぞ、祖先の武功を受け繼いで天晴れ武術の達人と唄はれし程の父をもつた俺ちや、今度こそは俺が一と働き、祖先より傳來の銘刀を眞向に振り翳し器械の力が強いが、我肉弾が強いが、獨兵の素頭を、この銘刀で十個は斬り落さねばならぬ考へちや、元來日露戦争の折柄携帶する筈であつたが、年は若いし、少尉の身では、不動の銘刀は些と荷が勝過ぎる、なんの武功もなしに凱旋するやうな事があつては、刀の手前も面目なしと、態さ他の刀をもつて出征したが、日本刀は宜く切れる、その切れ味はまた別だし、彼の黒溝臺附近のゴザツク騎兵との衝突の折りちや、敵の三騎を大袈裟にやつたが、我ながら其の斬味の見事さには驚いた、無名の新刀でさへ其れ

だもの、不動國行、どれ位ひ斬れるか、今から楽しみにして居るが、どうだ此んな銘刀は先づ少なからふ、欲くはないか子、しかし貴下は重砲だからな白兵戦がないから帯劍の必要はあまりなからふ、なんぞ云つても、戦争は實驗だ子、戦場往來の武士として昔は巾を利したものだ、今も矢張り一度より二度、三度五度と経験の積むほど剛膽になる者で、實際實戦に臨んだ者の眼には、演習なんかは馬鹿らしい感じが起る、尤も今回は演習に行く氣で居るが無事で凱旋しやうさはおもはぬ、骨となつて戻る覺悟ちや、は、日頃は到つて無口である、大尉は不言實行の人であつた、活三氏は宣く伯父さんの氣質を知つて居る、それに今日は常になく宜く饒舌る、而して殊の外の御機嫌である、活三さんも思はず伯父さんの勇しい話に釣り込まれた。

「伯父さん、貴下は日露戦争に御参加になり實戦の苦を賞めておいでになれば、實験だの経験だのさ仰在いまするが、おのが一命を投げ出してかゝれば左のみ敵弾に冷々するやうなこともありませんまい」「イヤ左様ぢやない、生命を投げ出してかゝれば恐くないだらうとおもふは大間違ひサ。眞の勇士程敵弾を恐るるよ、臆病な奴ほど敵弾を恐れぬ、これがまた不思議だ子面して勇士は大膽だけに敵弾を避やうくとして安全の地を得るが臆病な奴は反對で敵弾を避けるの、安全の地を得ることが出来ない、だから負傷するのも早い、死ぬるのにも早い、つまり九死の中に一生を得るが眞の勇士さ、死ぬるばかりが勇士ぢやない、一日生残つて一日國家のために盡すのが眞個の武士的精神である、しかし其れも其の場の次第で、無理から死なればならぬ時があるから、實戦は疊の上で議論は出来ない、たゞ實戦に功を経た者はさも

すれば彈丸を安く見て、おもはぬ不覺をさる事がある、細心にして大膽なれば千古の名言だらふ」
活三氏は伯父さんの勇しい話しを聞きながらなんぞおもふたか大き溜息をホツと吐き「私は到底伯父さんの眞似は出来ませぬまい」大尉は濁つて兩眼を見開いて、活三氏の顔を穴の明くばかりに打ち眺め「なに伯父さんの眞似が出来ない、なんで出来ない、俺の眞似がなんだ、宜しく俺以上、百倍家いものになつて呉れんでは困る」「だつて私はこんなに病身ですから、到底國家の干城として、しかも部下を指揮す將校としての責任は完ふすることは出来なからふと思ひます、たゞ祿々として軍隊の寄生虫たらんよりは、寧ろ軍職を辭するがお爲めではなからふかと思ひます」「活三ッ。」
大尉は大喝一聲、小林候補生をハツタと白眼んで例の鍛ひ上げた拳を握

「活三ッ、今一度云つて見ないか、怪からん奴だ、馬鹿ッ、病身だから軍職を抛つ、怪からん、軍隊を退ぞけば病身が無病にでもなるのか、何事業の人さなるにも其れ〜其の道に依つて苦心もあれば働きもなければならぬ寝て居て成功が出来るとおもふか、働くの嫌なら死んだがました、死んだら永久に寝て暮せるよ、そんな量見ちや怪からん、しかし活三、俺が怒るも叱るのも此れがおしまいちや、これが最後ぢや、俺の親族で軍人になつて呉れたのは貴下一人ぢや、水戸藩中においても武臣の家と云はれた佐久間家なり小林家ぢや、子々孫々まで帯刀の家柄と傳えたい、だから石にかぶり付いても、何卒が軍服を着て死んで呉れ、國家のために死んで呉れ、疊の上では死んでくれるな、而して祖先の武功を忘れてくれるな、此れが俺のたのみぢやまた俺の叱言の云ひ終めぢや、俺は今日逢たのを最後とする、だから乃木さ

んには申し譯けがないが貴下に酒を馳走する、決して俺が云ふ事を無理なさおもひなさるな」活三氏は飄然として悔悟した、そして斃れて後已むの決心が出来た、覺悟した。「伯父さん、安心して下さい、貴下の教訓は屹度守ります、立派な軍人になります、決して疊の上では死にません、ごうが安心して下さい、實は今日こうして参りましたも、到底此の病身では軍務に耐られまいから辭職してはごうがさ再三軍醫から忠告され、御相談にまゐりましたが、死ぬまで軍服は脱ぎますまい、イヤ斷じて脱ぎません」大尉は此の決心を聞いて初めて元の御機嫌に復した、しかも會心の笑を洩して「宜く得心してくれた、それでこそ小林家の血を受けた豪傑の子孫ぢや、サア一杯呑んで歸ってくれ、此れが今世の別れとおもふて充分にやつてくれ」大尉は充分に戦死の覺悟を示し活三氏

へは尙ほ軍人として心得を申し聞せて、而して歸る可愛の活三氏の病氣で水戸へ歸るを停車場まで送られた。期くて間なく大尉自身も萬歳の聲に送られ久留米を跡に出征の途に就れた

第二十七彈 (夢も結ばぬこの露營)

本來ならば此の邊で青島攻撃參加部隊の各師團、重砲兵、員數等まで詳細に述べればならぬが、何を云ふにも軍機の秘密に屬する事で、諸君の御満足になるまで詳細に述べることは出来ない、たゞ久留米師團に動員の令が下つて先發部隊として出征した事は、讀者も新聞紙上の記事で御承知であらふとおもふ、此の外には第四、第三、第二、第五の各師團も多少動員があつた、殊に深山重砲兵も出征の途に就た事も御存知であらふ。

扱て我が出征部隊の山東上陸は龍口であつた事も既に述べておいたが、何分風雨のために行進の困難であつた事は筆紙に盡し難く我が陸軍の活動は寧ろ敵前に立つて砲火を交へるの騒ぎぢやなかつた、此の事に就ては前にも大略述べてはおいたが其の後の詳報に接したから重複にならぬ範圍で述べることにしやうと思ふ。

抑々も我が青島攻圍軍の各部隊が龍口に上陸した其の日から、車軸を流すに云はふか篠を亂すに云はふか、盆の水を打ち明たやうな大豪雨であつた我が軍は此の雨を衝て進軍するのであつた、しかも其の目的は蕉山館から新城を経て萊州に向ふのである、龍口から萊州までは陸路僅かに十八里、二日掛けの行軍ならば楽なものである、しかし蕉山館前面には張西、東良、鐘離、翹等の各河川が集り、朱橋鎮には朱橋河が帯の如く流れて居る、此の外に

小まな川は數知れずである、しかし東長、張西の兩河のを除いては、不斷に砂河で水は流れて居ない、しかし一日降雨なる砂河は忽ち濁水流れて河床の砂は流れて深淵となり淺瀬となり、砂は集つて洲なるので、もう河床は昨日の面影なくなつて、どんな變化して居るか判明らない、殊に山から流れて来る岩石は猶更ら此の河底を荒すのである、我上陸軍は此の川を渡るにこれだけの苦心をしたか困難をしたか、おまけに道路と云はず畑と云はず水に浸つて居る、川と云ふ川は濁水氾濫して渦を巻いて居る、夫れに幾万の兵、幾千の軍馬車輛が通過するので泥濘は馬腹に及ぶと云ふ有様であつた。殊に此の河川の徒渉には非常の苦心であつた、困難であつた、切角架けた工兵の軍橋は、潮の如き濁流に押し流される、浚はれるで、どうにも焦うにも始末に了ぬ、もう此の上は徒渡りに押し渡れよ、其處になるも勇敢無比の我

が軍人は、河もなければ濁流もないたゞ青島に敵あるのみで、互ひに扶け合ながら「そら石だぞ、其處は深い、此方へ來い」と河底を探つて押し渡つた。たゞさへ雨に濡れ鼠のやうになつて居る我兵士は、この幾つかの太河、小川を渡るので、征衣はツブ濡れ、なアに糞ツ、行燈の子ちやあるまいし、濡れからつて破れはしない」
滴る濡くを絞りもあへず、夜ま日に繼で前進し、雨は止すでも露繁き、高梁畑の中、天幕を張つて横になつても、夜氣は身を襲ふて肌冷やかに、天幕をもるゝ雨が夜露か、しばし假寝の夢さへ結ばず、征服を乾かさんにも薪はなし炭はなし、風餐露宿、つぶさに艱苦を嘗め盡したが、勇氣は盛々加へるばかり、鬼神も三舎で云ふ我軍人の活動振りは、やがて國威宣場の基礎となるのである。

話には少しあさへ戻るが、風雲何さなく穏やかならぬ七日の夜、我の砲兵は龍口市街を出發したが、その目的地は云はずし知れた青島方面、唯だ暗の夜道に響くは樞機たる砲車の音と馬蹄の音のみで、全軍寂として聲なく、壯士慘として駭らざる、其の光景、物凄くもまた勇ましく、見る人おもはず襟を正さずには居られなかつた、しかも、其の夜は例の暴風雨で、此の部隊の進軍は、歩騎の行進に幾百倍の苦心であつた、朝れば八日、風も熄み、雨も齊れ、微かに太陽の光りに浴することが出来た、さて此の苦心の進軍に先立つて我が騎兵隊は既に白沙市を過ぎ、敵の動靜を探りながら、平度(ヘイタク)さば讀す方面に向つた、而して白沙市からはいよ戰鬪状態に移つて前進し、平度にて數隊に分れ、一隊は高密に、一隊は膠州にまた一隊は即墨に殺到したのであつた。

我が鬼佐久間大尉は一中隊を卒ゐて即墨方面に其の雄姿を現した。

第二十八彈 (軍司令部の前進)

此處で軍司令部の前進となつた。

青島攻圍軍司令部募僚は、軍と共に龍口に上陸した、神尾司令長官は九月十一日暴風雨後の泥濘、見渡す限り濁水満々たる道なき道を冒して龍口を進發し、征獨の大旗を北馬に進め十二日黄山館に到着、しかも暴風雨のために村落の民家は破壊され、洪水に押し流され、軍の宿舎に充べき所もなく、將軍も亦高粱畑の中に天幕を張り士卒と共に露營して食事は道明寺糲に牛肉の鑑詰は、イヤもう日本の軍人ならでは出来ない辛棒。かくて神尾軍司令長官は十三日まで黄山館に滞在、十七日店子に出軍

夫れから高密、高密から膠州へ進まれた。
 軍司令部の進發から次いで兵站司令部の苦心を語らねばならぬ。
 新聞紙上で既に御承知でもあらふが、龍口上陸軍の兵站司令部は第六兵站
 部で司令官は高柳大佐である、其の下に服部少佐や中村大尉などの手腕家
 が、海上輸送、陸上輸送の計畫に晝夜兼行、寂食をさる間もない程の多忙
 であつた。

我攻圍軍全隊が上陸の日から暴風雨の中に行進して敵地へ進む苦
 勞の其の身にも後顧の憂さなからしめたのは、全く我が兵站司令部の畫策よ
 ろしきを得たからである、殊に龍口から萊州までの輸送の大任に當つた川上
 兵站支部長の苦心と努力は非常なもので、國民は直接に戦闘に参加して砲火
 をさられば勇士とも猛將とも云はぬが輸送の任にあたる兵站部の惡戰苦闘を

思ひやりまた感謝せねばならぬ。

天候は險惡なり、道路は泥濘なりかて、加へて支那は秋の收穫期なり、車輛
 も駄馬も徵發に應じてくれず兵站部の輸送上、茲に多大の障得を受けたので
 ある、其處で龍口かれ海路五十哩からある海廟口から海上輸送を開始した
 海廟口は平常は戈克の港とで非常の遠淺である、それでも陸送よりも便利
 である、此處から萊州までは一里半、此處に高柳兵站部の出張所を設け
 毎日輸卒が萊州まで通ふて軍需品を輸送した、萊州から先きは第五兵站
 部の受持イヤ監理となるのである。
 龍口川上支部の輸送を終るご全時に高柳兵站部は敵地へ前進した
 此の龍口上軍大部隊の中で、殊に異彩を放つたのは我が陸軍の航空隊であ
 った、先づ上陸當時の苦心と其の愉快さを語らふ、これも御案内でもあらふ

か我が航空隊の飛行機は、單葉復葉取り交せて陸揚せられ格納庫もまだ出來てない「なんでも構はん、一ツ豫備飛行をやらふぢやないか納庫は他に任せて」てな調子で、イザ飛行と云ふ段に、例の暴風雨に遭遇した格納庫でもあれば引ッ込んで置けば済むことだが、格納庫はなし、天幕張の中だから此れを保護する上にどれだけ苦心したか分らない有川隊長、始め各隊員は食を忘れて飛行機の保護に努めたもので兎も角其の甲斐は此處に現はれ、かくべつその損害もなく無事に保護したつたは、これまた飛行外の苦心であつた。處ろが我が海軍の飛行機は、既に青島の上空を占領し、敵偵察の爆彈投下のさ、盛んに活動しつゝある報導に接しては、もう辛棒がしきれなくなつて來た。

「おい／＼海軍ばかりに任せちや置けないぜ、一ツ遣らふぢやないか」左

様だ、海軍の奴等も氣が早いぞ、少しは遠慮もありさうなものだが、獨りで飛んで喜んで居やがる今に見ろ、驚かして遣るからな、今日も飛んださうな忌々しいな、血氣盛りの將校ばかり、もう脾肉の嘆に耐ないから有川隊長も制止兼ね。

「ぢや豫備飛行をやつて見る、その上故障なくばすぐに前進しやう、此方は道が悪からふが濁水満々だらふが、其處はお構ひなしだから始末が早いかられ」いよく隊長の許しがつた、さらばさげかり、天幕の中から曳き出した飛行機は、先づ龍目市街の上を試験的に飛揚した、一回は三百五十米突の高空で市街を一周し一回は人家を摺れ／＼に飛行した、支那人の喝采は非常なもので、飛行機なんか初めての目見得だから大變な騒ぎであつて、然も始め人は居ないと思ふて居た奴が低空飛行に人の乗つて居るのが見付かつ

たのでイヤ驚いたの驚かないのまるで喪心せんばかりに驚いた。
十三日は一臺で二回の飛行で終り、翌十四日であつた、四臺の飛行機が交互に飛揚し、西へ去るかと思へば東へ現はれ、高く飛ぶ時は雲に入り、低き時は頭の上から押へ付けるやうに南へ北へプロペラーの音天に響き一高一低、見る者をして快哉を叫ばしめた。

此の試揚を了つて隊長以下休憩して居る處へ、五名の支那人が恐る／＼やつて来て、隊長へ面會を求めた。名刺を見ると此の龍口の町長で我が舊幕時代のお庄屋さん見たやうな人物さ、それに有志家との事であつた、有川隊長は面接し、通譯をもつて何用あつて来たかを尋ねると、彼れ曰く。

「實は昨日と云ひ今朝かけて、突然沖天に怪音あり、仰ぎ見れば大鷲の如く、低きに下るを見れば鳥にあらず、兎も角怪物の出現と我々安堵の思ひ

をなさず然るに貴官この怪物を操縦に司たりと聞き、仰き願はくば日本大官閣下、怪物に就き其の産地及び利用する手段を説明あらんことを希ふ」
さ来た有川隊長は、吹き出した程可笑かつたが、相手が生眞面目なまで若き將校達が通譯の言を聞きながら。

「こりや耐らんツ」

さ横ッ腹を押えへ笑ひ轉げるを尻目につけながら、親しく飛行鐵の側へ案内して此の怪物の名それから軍用としてば、敵情偵察、爆彈投下の事なんか懇切に説明し、機を曳き出して塔乗し推進機の音を響せたので、例のお庄屋さん有志家の驚きは非常なもので五人一緒に尻餅ついたら腰を抜かして了つた「ごうちやお前達の中で乗つて見やうとおもふ豪傑はないか」さかればれ眞面目になつて震い出し、頓首再拜、塔乗無用と叫んで逃げ

て仕舞つた、それから今に飛行隊では、飛行中止の事と「塔乗無用」の支那語を使つては笑ひ話しの一ツとなつて居る。
扱て試揚は此れで了つた、其處で龍口を中心として萊州、沙河、白洲市、平度、黃縣、超遠地方、の大空を占領し先づ支那人を驚嘆せしめた。

第二十九彈

(青島 防備の偵察)

我軍は以上述べたる如く、海に陸に又空に獨の立籠る青島に殺到した、しかし青島の防備は決して怠慢ではない、何處までも用意周到至れり盡せり、殊に進歩せる科學的防禦は此れを破壊するに多大の犠牲を拂はねばならぬ、無論其れは我に於いては覺悟の前である、しかし其の防禦が如何なる方面に於いて如何なる手段を採いて居るか、何の方向に隙があるか、油斷があるか

用意があるか、此れを偵察せねばならぬ、肉弾くとも云つても左様輕々しく戦争が出来るものではない、此の邊の事は十年前、苦い經驗を旅順に嘗て居るだけ我軍は細心である、先づ敵の防禦偵察に苦心を要する、これは騎兵隊の役目となつて居るから、平度から即墨へ、更に膠州、高密を先づ騎兵隊をもつて占領し、それから隊を分つて各方面の偵察となつた、其の偵察任務に着いた各斥候隊の報告は、既に前にも述べておいたが其の後の防備に就いて得たる情況は大畧左の通りであつた。

○第一線防禦陣地の防備は 海泊河の左岸には堅固なる數箇の堡壘あり其の位置及び防備の要目を擧れば

▼一、臺東鎮東方堡壘 西方を第一東方を第二堡壘と稱す共に閉鎖堡壘にして各箇獨立して防禦を爲し得べく、且つ其の堡壘間は散兵壕を

もつて連絡せられ、敵に對する應戰上時としては一集團となり、時として分立して防禦することを得、且つ鐵條網をもつて嚴重に警備せり

▼二 仲家窪堡壘 臺東鎮東方にして仲家窪の西北方に有り、之を第三堡壘と稱し側防用火砲の砲座を有し、矢張り鐵條網を張れり。

▼三 元家庄堡壘 第四堡壘と稱し各堡壘の中央に位ひし周圍に鐵條網を張る第一第二第三堡壘と全じ

▼四 小湛山堡壘 本防禦陣地の中堅にして第五堡壘と稱す、容易に人を近すけず、内容は不明なるも非常に堅固に作られたる角面堡にして此の線に於る防禦の主力なり。

▼五 湛山堡壘 閉鎖堡壘にして本防禦陣地右翼の據點にて三角面堡にして堅固に形成せらる。

○主要三砲臺の攻防設備 此の線に有する防備は海陸兩面に對する最後の防禦工事にして多額の費用と最新の學術とに依りて形成せられたる者なるも警備嚴重を極め内容は判明せざるも、我軍の偵察と探偵は大要左の如く探知せり。

- ▼一 モルトケ山砲臺 獨軍左翼の據點にして山上に重砲座を有し散兵壕を設け防禦備砲は中口径榴砲なり。
- ▼二 ビスマルク砲臺 角面堡にして兩側に重砲三門の砲座を有する外に砲戰用大口徑の大榴彈砲の砲座あり、四周を砲撃し得べく兩側砲撃用砲臺の設備なるが如し。
- ▼三 イルチス砲臺 大口徑及び中口径の重砲四門あり此の外大口徑の榴彈砲を有す、此の砲臺の外にイルチス山上にも大口徑の重砲二門

ありき。
○海上正面に對する防備 此の方面に於ける防備は左の五砲臺にして其の攻防設備を擧げば、

- ▼一 灰泉角砲臺 左方露天砲座大口径砲二門、右方ベトン穹窩内に中口径加農砲二門を有す。
 - ▼二 オーガスト岬砲臺 中央閉鎖角面堡にして左右兩側に露天砲座ありて大口径加農砲二門、中口径砲二門あり。
 - ▼三 臺西鎮砲臺、露天砲臺にして大口径加農砲四門を有す。
 - ▼四 灰泉角東北砲臺、露天砲臺にして砲四門を有す中口径砲なり
 - ▼五 エヌイサン砲臺 中口径防二門あり。
- 以上が本防禦である、されば此の防禦線以上は租借地境界線、白砂河を第

一線にして、遠くは即墨附近に北進し、常に警戒して居たものである。殊に山東鐵道沿線に至つては高密、膠州などは尤も彼れの警備して居た重要の土地であつた、處が暴風雨のために正可もおもひ、一寸油斷したばかりに即墨、膠州、高密まで占領せられおまけに日本軍は龍口の上陸地點を引き揚げて、勞山灣を占領し、此處から敵前上陸を敢行した、その大膽な遣り方には、青島の獨軍も驚いた、しかもおのが眼前に重砲隊が上陸したと知つては、益々驚ろいた、開た口に牡丹餅なら宜い、海軍陸軍の兩飛行機が空から爆彈を投下れては助からぬ。

第三十彈 (攻撃軍の戦畧奈何)

青島攻撃は云ふまでもなく要塞戦である、此の要塞戦に就ては諸君も日露

戦争の旅順攻撃の容易でなかつた事から、今回の青島攻撃がまた容易でない事が、略ぼ御推察あらふとおもふが、どうして要塞戦か守るに易く攻るに難いが、其れ等の事から、要塞と云ふ攻防何れにも戦争が出来ただけのお話しをしやうとおもふ、少し専門的講話になるやうだが、青島攻圍軍の活動さ知るために少しばかり述べて見やう。

元來此の要塞なるものは、如何なる場合に於ても未遂に陥落すべき運命をもつて居ることは、既に兵術家でなくとも御存知であらふとおもふ。

併し此れを陥落に就ては如何なる戦術をもつて要塞に當るかに就いては、また議論區々になつて一致して居ない。

獨逸の有名な戦術家サウエル將軍の説は、恠である、曰く「要塞を陥落せしむるには徹頭徹尾、強襲を用ゆべきで、疾風迅雷の如く

要塞に殺到し、優勢なる兵力と精銳なる火砲とを惜むなく投げ付けて一氣呵成に肉薄突貫すべきもので、其れが爲め十日間に一軍團の兵を全滅して此れを占領するよりも僅か一日間に一軍團の兵力と犠牲とを全滅攻撃の目的を速やかに達成するのが要塞攻撃の本旨である、單に砲撃や封鎖や正攻などの手間緩い攻撃法を採つて、長時間敵前に兵力を引き付けられるのは、既に敵に一籌を輸したものである」

要之ザウエル將軍の説は、十日で落すものなら、十日間に失なふ兵と、砲弾を一日間に失なふて陥落のが要塞攻撃軍の採るべき戦法である、如何にも日本軍人の喝采しさうな議論である。

また白耳義の築城家として有名なリアルモン將軍は、この強襲法には大の反對である、其の説は恠である、曰く。

「科學的施設の歩進した今日の要塞を攻陥するには、正攻法より外に採用すべき戦法は無いのである」

と、何れを學ぶべきかは、實に世界の戦術家が研究に頭を痛めて居る所であつた所が、旅順に於ける日本の攻撃法と、露國の防禦法とは、幾多研究の材料となり、築城法に改良すれば攻撃法にも其れだけ研究されたのである。

現に白耳義の三大要塞、リエージュ、ナミュール、アトンプーフの如きは確かに正攻法をもつて攻撃し來る場合を主要とした要塞の築き方であつた、云ふまでもなく正攻法を理想として居るプリアルモン將軍の設計であるからである、此の要塞戦に於いて一方は強襲の論法をこつて戦かひ、一方は正攻法の論法で戦かふた、戦術家としては此れ位興味ある問題はなからふとおも

ふ。

併しプリアルモン將軍も要塞を絶対に陥落しないとは云はぬ、誰だ正攻法に依るに非ざれば陥落が望まれぬと云つたのみである、つまり決着すべき問題は、攻圍の第一時から陥落の最後まで時間の長短にある、旅順の要塞でも日本軍が八月二十二日の第一回總攻撃に於いて、あれ以上の犠牲を惜まなかつたならば、僅か一日間を以て攻略し得たのであるとは、此れ某將軍の談である。果して左様であるかどうかは過去の歴史を評するのみで何んにもならぬが、現に青島と云ふ目的に對抗して居る我が司令長官神尾將軍は、強襲的戦術が正攻法であるか、此れは軍機に關する重大な問題であるから、此處に明日に述べる譯にはゆかね、しかし日本人の氣質にはどうも強襲的攻撃が適當かもしれぬ、正攻法を採るの辛棒が出来るかしらん、士卒ともに

元氣旺盛、火砲と肉弾の交換をもつて當然のやうにおもふ勇士の腕揃ひさ
 來ては眼中には既に敵と云ふものをゆるさぬと云ふ日本魂には、科學の進歩
 も、戰術の進歩も破壊する力があるから物凄くもまた恐ろしいのである。
 此處で青島第一の砲臺設備の完全なのをお話しやう。
 防禦設備の事は前回で述べておいたが、主要三砲臺の一、あのビスマーク砲
 臺は實は青島の生命と云ふ大切な砲臺で、この砲臺を骨子として、モルトケ
 砲臺（左翼）イルチス砲臺の二砲臺が、恰かも唇齒輔車の關係をもつて頂度
 人間が兩手をひろげて居る形ちである、而して此れ等を連絡するには、シー
 ドリツピ、イナルスの二ツの山に砲座を設けて居る、抑々此のビスマーク砲
 臺は青島要塞の主腦だけ、其の背面に對しては、攻防ともに非常な威力を
 もつて居ることは云ふまでもない、されば他の砲臺はよし一時に陥落しても

此の孤城イヤ砲臺に立て籠つて、飽まで敵を苦しめんと云ふ、深い／＼意味
 のある砲臺で、獨軍は此の砲臺を最後の場所と云つて居る、内心は兎も角も
 口だけはビスマーク砲臺を最後の墳墓の地だと、一寸聞いても勇ましい、が
 その舌の根の乾かぬ下から、捕虜の数が日一日増加するには、日本軍も呆
 氣ないさ云つて笑つて居る、誰やらの川柳に、
 「パンに飽き徐々米を食に来る」
 するま墳墓の地を日本だと訂正したかも知れん、しかし左様は云ふものゝ、
 そんな米の飯を望む奴ばかりもないもので、飽までもパンを嚙つて日本軍に
 一泡吹かせんさ、それ／＼準備してまつて居る、此の砲臺の内部を少し述べて
 から本文、即ち鬼大尉佐久間善次君、即墨進發、流亭より白砂河沿岸
 強行偵察、威力をもつて敵の動靜、警備、防禦の事兵の配置まで偵察する

こ云ふお話にうつる事にしやう。

第三十一彈

(飛行機來る噫愉快)

青島要塞三大砲臺の隨一、所謂獨逸軍最後の地と云ふビスマーク砲臺は支點堡壘の數だけでもモルトケ、チルチス兩砲臺の連絡として十個所、次點堡壘五ヶ所、何れも最近の築城法をもつて築き上げた完全無欠な構造であることは云ふまでもない、夫れに衛戍兵として歩兵五ヶ聯隊、騎兵三個中隊、要塞工兵三大隊、要塞砲兵四大隊、これに遊動防禦隊として歩兵二個聯隊、騎兵一箇中隊、野砲三個中隊、各堡壘線は東西南北何れの方面に對しても堅固なく、防禦編成を施して居る、殊に物凄いのには、此の連絡線の數箇所に分派堡、その間隔には一連に歩兵陣地があつて、其の前

面には鐵條網、鹿柴、塹壕、地雷等、あらゆる障礙物が布設されてある。火砲には獨逸はお手の物だけに、二十一珊知の榴散彈、二十八珊知の榴彈砲十五珊知の加農砲、十二珊知の加農砲等である、是等最新式火砲は隱見式又は堅固なる砲塔装置となつて居る、此の外野砲、山砲、見渡す限りには列を布て居る、堡壘の外壁は、如何な大砲彈も犯すことの不可能なヘトン壁をもつて固められて居るから、どんな猛烈な彈丸もゴム手鞠のやうに勿れ返されて仕舞ふ、中にも攻撃軍を戦慄せしむる爲めに据へ付りたは、上下左右前後自由自在に旋廻することの出来る八方睨みの大砲である、此の大砲は獨り此の砲臺のみでなく、イルチスにもモルトケにも据へて居る、こんな砲臺に肉迫する我が軍の苦心は實に慘憺なものである。其處で此の青島を旅順に引き直して説明するさ、防禦首線、または本防

禦線とも云ふ旅順の東雞冠山、盤龍山、二龍山、松樹山の諸砲臺が、モルトケ、ピスマーク、イルチス、シードリツヒ等の各砲臺で、防禦線乃ち、前面で述べた臺東、鎮東、仲家窪、小湛山、湛山の各堡壘が旅順の南山、大孤山、大白山等である、また旅順の二百三高地の如きがイチルス山頂上の堡壘で此れが第二防禦線である、また灰泉角イチルス岬の砲臺は旅順の海回防禦の老鐵山のやうなものである。

旅順に比較してこそ、其の規模こそ小さいが彼と此れとを比較にならぬ程すべての點に於て進歩せる學術を應用して火砲の如きも實に優等無比であるから、其の堅固なこゝにかけては東洋に於ける不落の要塞である、殊に守るものは世界の強國、獨逸の精兵である、我が攻圍軍の苦心はまた想像の外である。

時は九月の十八日、我が陸軍には龍口の上陸地點を打ち捨て、勞山灣に上陸を開始した、此の事は上陸軍の報告よりも我が航空隊の報告で直ぐに分つた。

まだ明けやらぬ十八日の拂曉に頭上の空に推進機の音を耳にした我即墨占領の騎兵隊では、敵か味方か、飛行機だ飛行機だ、何れも宿舎を飛び出して、乗馬に爆弾でも投げ付けられては大變と銃をさつて空を睨んで居る、單葉の飛行機一臺、逢かの天空よりおいゝと抵空飛行に移るつて来る、佐久間大尉は兩眼鏡をさつて見て居たが。

「おいゝ心配するな、味方ぢや、はゝゝゝ陸軍飛行機ぢや、日の丸の國旗を樹て居る、此處に着陸する考へか知らん」

するま側に駆け付けて来た末安曹長が

「中隊長殿、所澤と仰在いまするが、どうも見事な飛行振ですな。東京に居たら珍らしくありませんが、私共はこの音が馬鹿に勇ましく、また嬉しくてたまりません、威勢の宜いものぢやございせんか」「左様だ、實にあの音は勇ましい、あの響きを聞くと、何だか腹が空いて御飯が旨いやうな氣がするぞ、皆な珍らしいだらふ子、私などは……」

と云つて我れながら可笑しかつたが「はゝゝゝ」と笑ひ出しながら「矢張り珍らしい方だ子」

無理もない、東京に居てこそ陸軍の飛行機と海軍の飛行機とが帝都の空へ訪問するから、あまり珍らしくもあるまいが、田舎の師團ぢや珍らしい、それも最初は敵が味方が分らないので、銃をとつて空も睨んだが我が陸軍の飛行機と知つては。

「愉快だ子」

「勇まましい子」

「どれ位ひだらふ、五百米突もあるかな」

「イヤ三百米突位ひだらふ」

佐久間大尉は此の米突の事になるなと急に眞面目になつて空を見ながら。

「誰だ、五百米突の三百米突のさ云つて居るのは、そんな照準で射撃しやうとおもふても駄目だぞ、二百五十米突」

流石に射撃にかけては御自慢の腕前だけあつて二百米突と狙つた所は實に大した眼力さ、これは後で分つて部下は舌を捲いて驚ろいたさ云ふ事であつた、大尉は二百五十米突と部下に教へて尙も飛行機に目を離さないで居る、其處へ飛行機上から何者が投下して、再び高空に飛揚して雲間に其の姿を